靈驗集

特 18
718

馬論集 第一篇

河上市藏先生 序文
中教正山本貞郎先生 合著
少教正木惟一先生

圜驗集序

讀肴字之書不若讀無字之書
也聞肴聲之声不若聽森殼之
声也然肴字之書亦涉傳無形
之道肴声之殼或寓微妙之音
鼎字與聲豈可少乎要之讀肴

與聽者顧其受用如何而已矣

抑

天鄉太神止爲德也至大矣祓

敎祖之爲澤也全廣矣此德也

此澤也會運而發爲支體之疾

者經靈驗而立除私心之晦盲

接神機而直明敎旨止所建祝

四方景從遠邇響應者果非偶

然也若夫其神悳團驗固非美

慮言語止所能傳也然獨舉斯

道不若與衆同其臭也獸感神

德不若與衆同其感也森字止

書可獨讀而不可與衆同讀之
無声之聲可默聽而不可與衆
同聽之獨讀獨聽之暴之狹矣
寧與同調之交同其樂哉是所
已此書之付劃剛之歟默則讀
此書受用此書者示於無字之
處玩味無字之深味則其自得
之不小少而赫ニ神意與生ニ
恬澹之氣躍ニ然於此中乎生
矣

明治三十三年庚子臘月一
陽来復前十四

東筒　河合市藏識

燈塔　三木惟一書

緒言

教祖神の御在世中の事なりとか或時時尾先生教祖の御講話を拜聽して儘の御講話を細文字に美濃紙二百枚計りに書取りて教祖の御覽に備へられけるを御一覽有りて時尾さん私が申したる事が書を認めると是位よりか書けませんかと宣ひしかば時尾先生は其書取をば直ちに火中に投せられしとぞ其後時尾先生は一層道の修行を致されて增々其妙旨を自得し教祖の御高德を攀ぢさせ給ひ

東筒河之市藏識

帶塘三木惟一書

緒言

教祖神の御在世中の事なりとか或時時尾先生教祖の御講話を拜聽して儘の御講話を細文字に美濃紙二百枚計りに書取りて教祖の御覽に備へられけるを御一覽有りて時尾さん私が申したる事が書を認めると是位よりか書けませんかと宣ひしかば時尾先生は其書取をば直ちに火中に投ぜられしとぞ其後時尾先生は一層道の修行を致されて增々其妙旨を自得し教祖の御高德を攀ぢさせ給ひ

おと承り傳へ居れど吾人如き者が御道の事を書き記すは迚も及ぬことゝ兼て心得唯自から心膽を練磨し天心を養ふ外なおと思ひしゑ今般同じ學の友河本益二なる人教祖神御時代幷第二世神第三世神の御時ゑ顯れお奇しく妙なる種々の靈驗どもを編輯し之を靈驗集と號して遠近の信徒方へ傳へたく又追々古き事は其傳へを失ふ事もあれば是非とも草稿せよと進められしかど前に聞き居たる事を述べて堅く辭おたれど教旨を記すとしては及び難きものあれど既に顯れたる靈驗を記す事は事實を其儘書くまでなれば敢て道の筋を記すと異なれば切ゑ草稿せよどの依頼ゑ依り尙立顧りて考へれゞ考へるほど到らぬ吾人輩が筆を執りて自然神德を汚し奉り其筋がらの違ひ等ありては御神慮に對お奉り深く恐れ入る次第にて需ゑ應じ難き事なれど又飜て思ひ直せど河本氏の言はるゝ如く古き事どもの歲月を經るに隨ひて誤りを傳へ或は其實を失ふも道のために

本意ならざれども かくも此書を編纂する事ではなしぬ願ふ處は此書を看む人々多くは同門の信徒なるべけを同門の誼みを以て不足を補ひ又誤れるをも訂し給ひて大体の上に就きて御神德靈驗の綾に尊き事を傳へ知らしめま欲しく思ふのみ

明治三十三年十二月　　編者謹識

靈顯集第一編目次

◎禁厭と說教の始め　一
◎御神詠により難船の御蔭を被る　四
◎御高德に感じ惡人善心に立歸る　九
◎御教諭を守りて癈疾全癒す　十三
◎御教訓を蒙りて長壽し尙家運繁榮す　十五
◎御講辭を拜聽して屈指の信者となる　二十三
◎御諭を蒙り病痾全癒し遂に道の蘊奧を得　二十五
◎惡心善心に立歸りて斯道に大功あり　三十
◎御說示に感じて大病全癒す　三十二
◎御教示に依り惡漢善人となる　三十六
◎陰氣を轉じて頭痛癒ゆ　四十
◎御神德草木に及べり　四十二
◎御高德によりて醉酗人逃げ去る　四十四
◎御講釋を拜聽して即座に肺病全癒す　四十七

◎鎮魂の修業よ感佩す　五十八
◎家改の回復幷御書翰にて神德を知る　五十九
◎狂人御蔭に依り平癒す　六十四
◎早魃に大雨の御蔭を被むる　六十九
◎威德鼠に及ぶ　七十一
◎神誠朗讀中脹滿全癒す　七十二
◎自然に任せ玉ひし御功蹟　七十六
◎怪物消滅す　七十八
◎魂の幸ひにて難病癒す　八十
◎贅全癒す　八十三
◎曇り晴れて清眼となる　八十五
◎七十歳の老母御蔭を蒙り若歸る　九十
◎靈夢に依り難病全癒す　九十三
◎赤痢病一時に全癒す　九十七
◎生來不具のもの完全なる身となれり　九十九

◎四高弟の中三高弟の概略を述ぶ　百
◎說教に感服し病癒一家睦じくなる　百九
◎說教を聞き改心して我が子の盲目開眼す　百十三
◎有り難き心になりて眼を聞く　百十六
◎迷夢覺めて宿痾全癒す　百二十
◎御一言を守りて病氣全快す　百二十二
◎一言を聞て悟りを開く　百二十三
◎神緣に因て脫疽病全癒の御蔭を受く　百二十五
◎大難を逃れて蘇生す　百二十九
◎神札を携帶して戰場の難を逃れ又戰功あり　百三十二
◎外人神德の尊きを始めて知る　百三十七
◎一夜の靈夢に病氣全快し壯健となる　百四十五
◎火元に詣て立所に神庇を頂く　百四十九
◎活物を呼出し不測の靈驗を蒙る　百五十一
◎靈夢により御蔭を蒙る　百五十四

靈顯集

第一編

中教正　山本貞治郎　合著
少教正　三木　惟一

◎禁厭を說教の始め

茲に教祖神の始めたまひし禁厭說教の御事蹟を伺ひ奉れば

教祖宗忠神文化十一年十一月冬至一陽來復の旦第三の御日拜の御時天地生々の靈機を自得たまひてより後備前國兒島郡田比村字梶原の生れにて年齡と云ふ婦人あり三年計り黑住家へ下婢奉公を爲して居りしが一夜甚く腹痛して悶亂し緣側に倒れて詰め込みてあがじを教祖御覽なされて我元來父母の死を悲哀しみしより遂に勞疾の疾をなり命の限りになりしを心を取り直

◎說教の功驗にて難船を遁れし神庇を蒙る　百五十六
◎一心を凝して繼母の病氣を救ふ　百六十二
◎一心の誠よて小兒の火傷平癒す　百六十四
◎孝子の誠天よ通し高大なる神德を戴く　百六十八
◎常の信心の功蹟に據り難船を助かる　百七十一
◎丹誠を凝らし父の病氣平癒す　百七十五
◎神德により病氣平癒し杖を棄つ　百七十七
◎神德を蒙りて賊難を免る　百八十
◎靈夢に和歌を賜りて老病治す　百八十一
◎癲病治して神恩に報酬す　百八十三
◎神明の御加護を蒙りて病氣全癒す　百八十四
◎丹誠を抽て大患の疾病癒へ及盲目晴る　百八十七
◎靈夢を蒙りて蘇生す　百九十
◎外人御蔭を戴き神德の尊きに感佩する　百九十四
◎稟生不具者自由健康の身体となる　百九十七

靈顯集

第一編

中教正　山本貞治郎
少教正　三木　惟一　合著

◎禁厭と説教の始め

謹て教祖神の始めたまひし禁厭説教の御事蹟を伺ひ奉れば

教祖宗忠神文化十一年十一月冬至一陽來復の旦第三の御日拜の御時天地生々の靈機を自得たまひてより後備前國兒島郡田比村字梶原の生れにてミキと云ふ婦人あり三年計り黒住家へ下婢奉公を爲して居りしが一夜甚く腹痛して悶亂し緣側に倒れて詰め込みてありしを教祖御覽なされて我元來父母の死を悲哀しみしより遂に勞疾の疾となり命の限りになりしを心を取り直

し御陽氣を載きて下腹に納めしかば斯る壯健の躰となれり此下婢も心を取り直し御陽氣をいただきなば全快すへきも此大患の場合に至りては如何論すへき道もなし寧ろ我が腹中に在る御陽氣を吹き掛けなばやと思召直にミキの腹を押へて御陽氣を吹き掛け玉ひしに忽ち腹痛全快したり是れが禁厭の始めなりと夫れよりミキは教祖を命の親神と思ひ教祖の御止め遊ばさるにも拘はらず内の旦那様は腹痛を直す事を覺ゑて厶ると頻りに東西南北に言ひ觸らしけれは是れを聞き傳へて腹痛を直し玉ふ程なれば眼病も直し玉ふならんと始めて目を痛むもの參りて禁厭を請ひしかは教祖は目の痛むものを直したる事なしと御斷りなされしを強ひて願ふ故やむなく禁厭を施し玉ひて連に平癒し夫より西風東風の人々聞き傳へ聞き傳へて蟻の群る如

く集り来だ朝戸を開玉はん内より群集の人等は戸を明け玉ふと我先にと押し合ひける故近所の人是では雜沓するならんと木札を製し早く參りし人より番號を以て追々順序を立て渡しけるに間には千何號と云ふ大數に及びしとあり一度手をふれ玉へは直に病氣治り又再發する者もあれは是れは人々の心の德を論し其心の持方行ひ樣正しく致させ度くと思召され天照大御神の御神德の尊き事人は其分御靈を載きて人と產出たる難有き事を御論しに相なり其御咄しを聽聞する人々惡人も善人と飜へり陰氣なる人は陽氣になり自然と人ゞ人の道を勤むる樣になりしよりつぎつき參り御座ながく成ることゆゑ始めは蒲團をしき御座なされけるも後には多人數となりし故近所の世話する人々より御高座を調へ奉りしかは其高座より御咄しあらせられ

し處毎日の御事にて御困り遊はすならんと世話人より月に何日と日を御定めありて御咄しなさる樣申上しかは則ち御神慮により二七の日を以て御かげ日と唱へられ御講釋を遊ばさる御事に相なりたり是れが御講釋のはじめなりと聞けり

◎御神詠よりの難船の御蔭を被る

弘化貳年三月拾八日の事なりしとや敎祖神四國路へ御渡海の折り備前國兒島郡小串沖(米崎邊)に於て俄かに大風起り激浪怒濤山の如くに打ち來れば大船小船を搖り上げ搖り下げ其凄まじさ何にたとへん方もなかりしとぞ近くに見ゆる五六艘の船は瞬間に或は沈み或は覆がへり抹して實に聞くも恐ろしきありさまなり敎祖の乘り玉ひし船も今や將さに轉覆せんとしければ其船に乘り合せし人々の顏色は靑ざめになり船頭等も必死となりて働きしが最早腕も痿れ力も盡きて今は如何とも爲すべき樣もなく此の上は神佛の御加護を蒙るより外に賴みはなしと覺悟せしが其の中の一人敎祖に向ひ斯る大風破のことなれは此の船も最早轉覆すへき事と存せらる御覺悟なさるへしと申上しかば敎祖は泰然として莞爾と笑ひ玉ひ更に驚きたまふ御氣色なくいとゞ落付き玉ひしが又も激浪押し來り今は危く見えけれは乘り合ひの人々アワヤと叫ぶ聲は船外に溢れり折しも夥しき潮水は船內に浸入して今こそ覆沒せんとす敎祖此のありさまを御覽ありて靜かに筆を取り玉ひ。

波風をいかで鎭めん海津神天津日を知る人の乘りしに。（著者曰く海津神は海を守り玉ふ神なり天津日とは人々日々拜し奉る天照す日の大御神の御

事なり御歌の意を略解すれはケ樣に大風大波が起りて今や船は覆らんとせり斯る波風をなせ鎭め玉はんやと上の句に述へ玉ひ下の句に天津日を知る人とは教祖御身の上の事を宣ひしなり日の神の尊きことを誰も知らざるものはなけれども教祖の知ると仰せられしは世間に云ふ一ト通り知ると云ふ意いあらずいよ〳〵日の神の御德を心の底に知り得玉ひて黑住左京宗忠と云は仮の符號にして直に日の神と隔てなき丸き誠の一心になるの意にして決して御慢心にあらず日の神の御德を以て遊ばされしなり一首の意は此の日の德を知りたる人の乘りて居りしに海を守りたまふ海津神よなせに此の波風を鎭め玉はんやとの御意ならん）と云ふ一首の歌を御認めありて海中へ投げ込み玉ひけれはアヲ不思儀や天をも衝くばかりの波風頓に鎭りたりとぞ其中に所〳〵より救助船なども來りて外の船に乘りて居て海中へ溺れたる人々をも助けたり其助けられし人の中に伯耆國東伯郡松崎二百九拾六番地伊藤定三郎なるものありしが此の人は其とき悴金十郎を伴なひ讃岐國金刀比羅宮へ參拜せんとて乘船せしに其船も又大風波に遭遇して終に父子共に渦卷く波の中に溺れて一旦水底暗き所に沈み定三郎思ふに親子とも此の水中に死す事を家内の者は知らざるなり殘念に存ずる内にフト両人とも浮き揚りたるに幸ひ一間許脇に船をり漸く其船に救ひ揚げられたり暫くして人心地付きたる後傍に居合せし人々に向ひて一命を助けられし大恩の禮を述べながら申すにはアヲ不思儀や恐ろしかりし大波が俄かに斯る平穩になりしは如何の譯なるやとさも不思儀そうに問ひければ人々口を揃へあれは

黒住先生が歌を詠み玉ひし故なりとて思はず涙を流し給へたり定三郎は斯の道の事及び教祖の御事なども知らざりければ普通の歌よみ先生との思ひ昔も歌の徳にて雨降り又色々の妙顯はれしことありと聞くさても黒住先生と云ふ方は歌の先生なるかと思ひける故其節先生に面謁も致さずしては遺憾なりと思ひ直に面謁をなし其后に至り斯道の有り難きこと及び教祖の御高徳なる事を聞き御神徳の難有ことを悟り終に本教の厚き信者となり中請儀の職までにも進み布教の事に力を盡せしは實に尠少ならず尚九拾餘歳に至る迄も信心厚く勸められしとなり此の神詠は啻に難波を免がれたるのみならず今も所々にて風波の爲めに船の將に轉覆せんとする時此の神詠を一心に讀み或ば紙に書して海中に投じて難船の危難を免れたるもの其倒しいと多かりけり總て神詠は其時計りにあらず今日只今にても疑ひと臆病を離れ眞實有り難き一心になりて唱へ奉る時は直に靈驗の顯はるゝものと信ずべし

◎御高徳に感じ惡人善心に立歸る

教祖御在中に或日朝早く起て見玉ひしに御宅（舊宅は今の御社の建ちし邊にて草葺にてありしと）の屋根裏に所々焦げ居りしかば御不審に思召され能く〳〵見給ふに七ヶ所計りも焦げ居れり是れはと思召し裏の方を見たまへは松木の燃殘りありける故さては我宅を燒かんとして何者か火を付けたるものならんと思はる人たるもの、爲すべき業にあらずとて深く其迷へる心を憐れみ給ひかゝる心得違ひの人をば何卒本心になる樣致したきもの

とて其燃え殘りの松木を御神前に備へ玉ひて三週間其人の誠の人になりて開運する樣にと只管御新念遊ばされしかど其后右の心得違ひのもの教祖の御許へ參り涙を流しつゝ両手を突いて申しけるは二十日計り前の夜御宅へ火を付けたるは私でありますが實に恐れ入りたる次第にて今更御詫の申上方もなく全く一時の心得違ひにて今日より思へば身の毛もよだつばかりなり大に悔悟いたし今日は改めて謝罪の爲めに參りましたとて前の始末を物語りしに前夜御宅へ火を付けんと思ひ松木に火を移し屋根裏七ヶ所も付けたれども不思議なるかな幾度火を付けんとすれども更に燃え付かず恰も氷に火をあてたるが如く惡心ながら如何なる神の御咎めもあらんやと前后を考へ恐ろしくなりたれば今日より本心に立歸りましたとて涙にむせひたり

教祖此躰を見そなはし大に悦び給ひて種々誠の道を說き懇に諭し給ひけるに彼れもいよ々々感服し終に神文を捧呈して善人となりたりとぞ偖此の者は俗に云ふ山伏又は祈禱者とも云ふ修驗者にて人々の祈禱を賴むときは色々の祟り障りあると云ひ或は狐狸の障りなど、稱へて人を迷はし金錢を貪るを以て業とせり然るに世の人教祖の教を聞くときは人の心は天照す大御神の御分心にして萬物の靈長なり其心淸く潔く正直に明かなれば日の神と同じ心なり色々の事に迷はず一心の誠に止まり日々天地御國恩の難有きことを取り外さず神、君、親の三ッの御惠みを忘れざる樣忠孝を旨とし銘々の家業は則ち天職なれば大切に勤め人たる道を行ふべし迷へば魔よると申して人の心が迷ふ時は其虛へ付け込み惡魔のより集りて樣々の因果祟をいた

す油斷はならぬぞと申す樣なる難有き誠の道を懇ろに說き諭し給ふ所より自然と世の人々修驗者の言を信せざるやうになりたる爲め祈禱などの依賴者も自ら減少せしより遂に道ならぬ惡念を生じ付け火など致せしものなりと然るを敎祖の御高德に化せられて善心に立歸り誠を勤むる人になりしとは實に難有き事ならずや

因に云ふ惡人なるものは心を疾むの人病人なるものは形を疾むの人なり形の病は醫藥を以て治し心の病は說敎講義等を以て治するが正當なれども斯道は誠の大道なれど疑ひと臆病を去り眞に難有き一心になる時は心の病も形の病も共に治して芽出度生き榮ゑ天地と共に限りなき樂しみが得らるゝと云ふ難有き深意を味ふべき事なり

◎御教諭を守りて癆痰全癒す

敎祖神御在世中の時岡山花畑士族某の室に癆痰の病にて永く病褥にありし婦人あり種々手を盡すと雖ども更に功驗なく家內中陰氣になりて晝夜憂ひ悲しみて居りしが或日敎祖神を御招持申上御禁厭を載さし跡にて敎祖神患者に向はせられ永々の御病氣ゆゑ嘸御困りでありましやう併しケ樣に陰氣になりては御庇は受けられぬ故今日より神前にて御拜をする度每に勸めて笑ふ修業をなされと御諭ありて御歸館あらせられたり患者は御諭しに隨ひ病褥を起き出で神前に向ひ如何に笑はんとしても笑ふ氣にならず又寢床に歸り又起き揚りては笑ふ修業をして居りしが或る夜神前にて笑ふ修行して居る我が姿が燈火の明りにて傍の襖にうつりしを見て不圖思ふに此癆せた

る垢の付きとぎりたる顔に髪は鳶の巣の如く化けもの、樣なる姿で笑ふを人が見たれば夫れこそ實におかしく思ふべしと眞からおかしくなり一聲不斗高笑ひを致しける聲を聞て家内の者ともは何事か久々ぶり病人の笑ひ聲が聞えたりとて急ぎ行きて見れば患者は病褥を拔け出て神前にて莞爾々々して居れり何事ならんやと尋ねければ益々眞からおかしく前の始末を物語りぬれば自然家内一統眞からおかしくなりて諸共に脇腹を抱へて笑ひしに是まで陰氣の家の内も何んとなく陽氣を萠し互に日々莞爾々々笑ふやうになると患者も大に快くなり日ならずして全快したり夫れより益々壯健となり長壽せりとぞ故に氣分勇ましく陽氣になる時は病も癒え開運をも爲すものなれど陽氣はぞ尊きものはあらざるなり

因に笑ふを以て陽氣とは云ひ難し一時身の快樂を覺えて謠ふたり舞ふたり笑ふたりするを陽氣と雖ども是れ等は眞の陽氣には非す邪陽の類にて尊ぶべき事にはあらざれども人の音聲を發するに付て何んとなく陽氣を萠し難病も全癒せし例少なからず

◎御教訓を蒙りて長壽し尚家運繁榮す

備前國和氣郡伊部村に木村清右衛門と云ふ伊部燒の陶器を製造する人あり代々早世の統にてありけるが或年伯父と同道にて京都へ參り時の卜師に両人とも運命を占はせしに伯父なるものは五十三の歳三月迄の壽命と云ひ清右衛門は五十歳迄の命數と云ふ然るに右の伯父は丁度五十三歳の三月に死去せし故清右衛門は易の判斷違はざるを深く信じ人たるもの其死する時を

知れど至つて樂しみ尠なく日々の家業も疎かになるが俗人の常なれど清右衛門は家業を怠り酒色に耽り散財など致しける内教祖神御在世中の事にて伊部地方へ御入り（清右衛門五十歳の春）御講釋（現今の説教所）遊ばされし御席へ清右衛門參り其御講釋を拜聽致せしに人は形の事を離れ心のみになりて其心を仮にも傷めざる樣にして見る事聞くことに付て心を養ひ只面白く嬉しく難有く神、皇、親の恩を知り何事も自然に任せ物に動かず屈せず能く心を鎮め身を働かしなば齡ひに限りなく百五十歳位は生きられ其百五十の齡を過しなば三百歳は活らるゝものなりと其御講釋は長く尊ひ事なれども皆覺えては居られずも頭りに有難く思ひ衆人は立ち去りしも清右衛門壹人居殘り教祖へ御面謁を乞ひ今日の御講釋の通り長壽は出來ますかと御伺ひ申し上しかは活られますと仰せられて又色々御道の御咄しも仰せ聞せられ清右衛門心魂に徹し益々難有く思ひ弥々活らるゝものと堅く信じつきまして又貴所は御長壽遊はさるゝかと申上しかど暫く御考へありて私しは斯の道を開かねはならんでのうと仰せらる清右衛門は御暇乞して立かけれは教祖は清右衛門殿物に飽ては立身出世は出來ぬぞへと仰せられ夫より清右衛門は生れ變つた心持にて家業を働き漸く五十の年を越へ五十一の正月元朝にはヤレ々々嬉しや黒住樣の御蔭にて死ねべき年を無事に越したりと家内諸共祝ひけりされど是れ迄遊びに耽けり家業を怠りしゆゑ家の内は洗ひし如く金錢は素より衣類家財等も更になくなり赤貧にして只有るものは借錢のみッヱ

清右衛門思ふに此地を一旦退かはやと思へども夫れでは貧乏に飽き此土

地にあらさし道理なりと種々工風し考へける内不斗御講釋に人智分別の及ばざる事は神樣へ御願り申上げ神助を蒙るがよいとの御論しなれを是れより御願念にかゝるべしと思ひ家族にも我は是より御願念を致すにより誰が參りても留守と申せと云ひ含め置き奥の間の御神前に於て御祓ひ（神言なり）を朝より晩まで奉讀致したれども別に是と申す御告もなし是は神の御力にも叶はぬ御事かと思案し又思ひ出し是では御祓ひを奉讀する事に飽しなり飽きではならんと晩飯後又御拜を始め翌日夜のシラ々々と明かる迄一心不亂に御祓を上げ朝飯を仕まひ又御拜にかゝらんと思ふ頃壹人の旅人參り私しは京都の燒物師でムるが清右衛門さんと云ふは此方かと問ふ家内私方でムるが生憎今日は不在なりと云ふ辭を奥より清右衛門是は御かげかも知らずと

思ひ先きから歸りて居たと奥より出で右の人に面會すれど御當地の陶器は名産なれど種々の色を遣ひ或は金色をつける等の錦手の品なく是に色繪なは一層面白からんと思ふて居りしに此村端より能く肥へたる老人が木村清右衛門へ敎へて遣はし呉と申されし故御尋ね申すなりとの事に付先づ挨拶を致し其御傳授は請け度くも御見掛の通り家貧くして御禮に困ると申しければ義俠心ある男にて私しも此度金刀比羅へ參り旁の道中ゆゑ貴所に敎へて我が業の障りになるにあらず御禮には及びませぬ敎へて上げますと申して夫より逗留して錦手の傳授いたし其傳授を請て清右衛門燒き出しけるに其當時は西國の御大名御通行の折にて伊部燒に金色等を帶ひたるは珍敷とて順次御買上に相なりければ地方の人々は御大名方の御買上に相なるとい

ふに一層信を置き頻りに賣れる樣になり後には自分方の燒き物にても引き足らす他の寵本の上出來の分を求め是に色繪して續々賣出し年を重ね繁昌して赤貧變じて金滿家となり田畑山林を求め別家等も立派に致し八十八九に至るも清右衛門氏は矢張り若きときの如く土或ひは薪の重荷を荷ひ燒物を爲す故に子息の申すに父上樣樂しみに燒き物をならさるはよれども重荷を負ふ事は大勢若き雇人も居ること故彼等へ御申付なされたきと勸めけるに清右衛門氏は何たる事を言ふぞ我は敎祖樣が物に飽てはならぬと仰せられし御一言にて此身代となり長壽も致し居るなり昨日迄荷ひし者が今日荷へぬと云ふ事はなひと怠らす燒物を致し敎祖神の御像或は御神水器など燒きて是を自分荷ひ道々の信心家へ遣はし其喜ぶを見て樂しみとせり明治拾

八年敎祖神の御社が美麗しく出來たれば清右衛門の悅び一方ならず既に敎祖神が嘉永三年二月神去り玉ひし時門人一同愁傷啻ならざるも只清右衛門のみ御神去りが遲かりしと申して御別れ申上るは哀しむべき事ながら御神去り後は御道御盛んに屹と開けると申し、よし明治拾八年の夏宗忠神社へ蛤形手水鉢(伊部燒)を奉納し其時一寸に足らぬ小さき紙に七ケ條を認め又米一粒に宗忠大明神と認め脇に木村清右衛門行年八拾八歲謹書と書き入れ是を本廳員某に出せるに其人眼鏡を掛て見るに依り清右衛門其人の年齡を聞き私しの子の如き年なり本廳に居らるゝ人が眼鏡をかけて見らるゝとはおかしき事なり私は是位な事は目鏡なしにて書しと清右衛門氏の壯健押して知るへし右手水鉢を捕る付じは正午なり是より歸ると云ふて七里余りも

ある處を高き下駄にて歩行し歸りけるは最も感心の事ならずや九拾二三歳の時妻歸幽せるを深く哀しみさひしきと申して伏して居らるゝを同門の人聞き及び清右衛門氏に面會して先生は物に飽ぬ事を活用して年と云ひ財産迄御惠みを得玉ふと聞けり妻君の歸幽は憐れむへき哀しむへき事ながら教祖神の御教の御場所と違ふことゝいもにはあらざるかと申す聲と共に手を拍ち直に起て手水を遣ひ天拜して夫限り氣分を活し元の如く燒物を致し樂しみて暮し御教の百五十以上にも活き榮ゑんと勇氣になり其後若き妾を呼び爲めに壽を縮めしが九十八九にて眠むるが如くに歸幽す實に人の命は心の置き處にて長くもなり縮くも出來るものならんが前記の事情を能く々々玩味ありて願くは形の事を忘れ心の德を知り御陽氣を十分に吸ひ形を健にして生通の修行致し家業を勉强して家を富まし往々富國强兵の基を立るは斯道にありける

因に云ふ教祖神の御一言は直に聽聞する人々の心魂に徹し其御言葉の如く何事も成就す又高弟方のすなはにして本文中陰氣になり伏しても只一言の下に忽ち蔭氣を拂ひ心を活し元の如く身を働かし業を爲す等の妙味あり

◎御講辭を拜廳して屈指の信者となる

美作國久米北條郡大篠と云ふ村に小林儉造（後に眞茂と改む）と云へる學者の醫師ありしが同村の豪家へ教祖を御招請申上度々御講釋ありしを儉造氏も聽聞し感する所あり神文を捧呈して入門せり其後は度々大元へ參拜し

手厚き信者となれり遂に御禁厭の御代理教さんと教祖に申上ければ教祖仰せらるゝに貴殿は杓子樣の物を以て人をまじなひなされと又其后月日を經て小林さん最早手の沖を以て禁厭なされと其后天心號を載きければ小林さん人並に禁厭なされと仰せられしよし夫より小林先生の呪に靈驗最も著しく多くの人を救ひ助けし事實に夥しく後には醫業を止めて御道を開かん爲め國々を巡廻して功ありと又小林氏は禮義正しき人にして或る時教祖を御招待致せしが折しも暑中の事にて建具を取拂らひ座敷にも庭にも聽衆多く詰め掛けたり然るに御講釋中俄かに大風吹き起り（舞風と云ふ暴風なり）砂烟立て既に小林の家に吹き入らんとしけれバコリ大變なりと人々周章狼狽す此の時教祖御高座より靜かに風の方に向ひ一吹き吹き玉ひしかは暴風忽ち吹き

返して風上に砂烟立ち去りけり一同是れを見て是は人の業にあらず神の御力なりと神の力とは所謂教祖を神樣と尊信したる事なり今尚其時に居合して此の樣子を見たる人存命にて教祖の神となり玉ふは偶然にあらず御在世中より知れて居りしと咄せしとぞ

◎御諭を蒙り病痾全癒し遂に道の薀奥を得

美作國に池田千代藏と云ふ人あり難病に罹り種々治療すと雖ども其功なく此上は御神德を蒙るより外はあらじと決心し駕籠に乘りて大元へ參詣し教祖に御まじなひを願ひたれど教祖千代藏氏に向ひ御治しなされと宣ひたり千代藏氏は妙なことを仰せらるゝもの哉と思ひ先生私しの病は難症にて六十二人の醫師にも治療を受たれども一向藥功もなき處より今日は態々御禁

願ひに參りました樣の次第にて私が治すと云ふ事は出來ませぬゆゑ何とぞ御治し下されと申し上たれど又も敎祖は御治しなされと仰せられ千代藏氏思ふに是れは遠方態々參りてツマラヌ所へ參りたものじやと心中不滿を抱き居りし內御講釋が始まり聽聞すれども是迄聞なれぬ事ばかりにて是れぞと思ふ事なし御講釋中に皆々樣今日御神前に樽が(壹斗入)供へて有りますがあれは邑久郡の或酒屋の酒が皆いたみましたので門人が呪ひを致しました處一夜の內に善き酒に直りまして御禮の爲め御供に致したことで有るから是より御神酒を差し上ます御戴きなされと仰せられ其御酒を皆々戴き千代藏氏も少し呑て味へは上酒も及はぬ程の名酒に有てりける故はて是は妙なり酒でさへ此の通り治るからは我が病も治せざる事は有るまじと

思ひ夫より腰を据ゑ滯留する氣になり段々御咄しを承はりしに人は天照大御神の御分心にて其心の活動によりては何事にても成就せざる事なしといふ御咄しが耳に入り疑と臆病を離れ御陽氣を戴きて下腹に納めなは自ら病は治すると云ふ事が少し分りて最初治せよと仰せられしことも分る樣になると惣身の苦痛も輕くなり眞に難有く思ひ廿日とかりも滯留して御講釋御呪を戴く內に本腹し神文を捧呈して追々信仰厚くなりたり或日小林儉藏氏の宅へ敎祖御入になりしと承はり御呪御守を戴かんと小林氏の宅へ參りたれども彼の禮儀正しき儉藏氏の事ゆゑ敎祖をは奧の間に御通し申上げ屏風を立て襖を切りて誰も猥りに入ることを許さぬ故千代藏氏は次の間にて半日計りも居たりしが他の人へ挨拶いたしたる聲を敎祖奧より聞き玉ひ

てツコに厶るは千代藏殿ではなひかと仰せられたり左樣で厶ひますと申し上げたれは教祖今朝から炬達の火が消へて居れり火のなひ炬達は寒ひものです火を一つ貰ふて下されと仰せられしかは千代藏氏は其御言葉に應じ臺所に行き（教祖の御入に付何かと取紛れ炬達の火にも心付かざるよし）火をもらひ奥へ這入り火を入れて始めて御挨拶申し上し處能く御出なされたと御悦び遊されしゆゑ今日は御呪れ守を戴き度おもひまして今朝より御伺ひに參りて居ましたと申し上げたれば教祖おまへも呪をする氣になりなさつたか私しが呪守を進せずとも村中近村の大家も小家も醫者も坊主も門を通る乞食迄が千代藏殿はよひ人じや善ひ人じやと云ふ樣になれば私しがれ守を進せずとも天より御守を下されるから左樣すれば御まじなひに御かけがあるぞと仰せられしと聞け

り迫々手厚く信仰し天心號をも御授けになり布教に盡力し教祖に大明神神號請願等にも上京し又道の爲めに難を受られし事もあれども委敷き事は後日に述へん

因に云ふ教祖神の御言葉は天命の儘なれは則ち御神宣にして只御一言にて人々陰氣を去り陽氣になり或は惡人も善人に飜ること多し總て古門人は一度の御教諭を疑はず信用し終に道德に進まれし人多し池田氏も教祖に御心やすくなりて後私しはドウも物が苦になりまして困りますと申し上られたれはいつも莞爾として麗はしき御顏色なるに其御顏を變へさせ玉ひて物を苦にする程惡いことは厶らぬと只御一言仰せられし事心魂に徹し夫れ限り物を苦にせぬ樣になりしとかや高弟方の中

にても池田氏の如き物を苦にせざる人は少し山が崩れかゝりても更に動かずと云ふ風にて能く心を鎮め居られしことは當時の信徒等能く知る所なり

◎惡心善心より立歸りて斯道より大功あり

高弟森金爲藏と申す教師あり性質剛强にして爭論抔を好み他の爭論も身に引受て爲すと云ふ風儀なり折から事を巧み訴訟せんと願書を認め連印を徵せんとて宅を出けるに近傍に教祖を御招請して御講釋中の處へ圖らず爲藏氏參り其御講釋を拜聽するに胸に釘を打たるゝ心地し御一言毎に心魂に徹し此御方は我が兼ての惡意を誰が御告げ申上て此の大勢の中にて我を誡め玉ふか何樣錐の莚に坐る如く去るにも去られず惚身に汗を流して聽聞するうち全く自分の心得違ひと大に感ずる所ありて群集の人々は立ち去りし跡に壹人忙然として夢中の如くなりし所教祖御聲を掛けさせられしかは爲藏氏は恐入て自分の身の上從來の心得違の事を一々申し上げたれは尙教祖より人の德人の守るべき道を和らかに懇々御論しになりたれは夢の覺し如く難有く感佩し改心して神文を捧呈し苦情の請願書も夫れ限り火に投じ夫れより毎々大元へ參り教祖の御講釋御咄等を拜聽し益々難有くなり信仰手厚く致し多くの人々を助け天心號をも戴き有名の先生となりたり教祖御神退後は專ら本教のため盡力し第一着に伯耆國へ赴き斯道の開けざる地を開き殊に米子町に於ては種々の靈驗著しく顯はれ就中全町の景山と云ふ家の老母は雪を頂きし如き白髮も黑くなりし處より靈驗の著明なる事を見聞

して入門の人多く引續き教祖に大明神々號請願等の節にも仝氏與つて力あり又二世宗信神退玉ひし後は大元の勤番教師となりて其功勞最も顯然たり

因に云惡に强き者が心改る時は善にも亦强きものなり或る道人の歌に

氣も强く心も强く誠をば格別强く持ては神なり、と詠みたり人は大膽にして誠を强く勤むるが第一なり善を爲す人にても心弱き時は自然心を傷め善人の罪を作る事多し愼しむへき事になん

◎御說示よ感じて大病全癒す

教祖御在世中備前國邑久郡鹿忍村に出井常八と云ふ人あり同人悴某拾四歲の時大病に罹りしかば兩親を始め家內中の心配一方ならず醫師よ藥やと種

種手を盡すと雖ども難治の症にして藥石の効も見ゑず衆醫も手を放しければ見て居る譯にも到らず此の上は神明にすがるの外なしと思ひ夫より大元へ參詣し教祖に御祈念を願ひしに教祖宣く私ば岡山に必ず參るへき約束ある故に御祈念は怠に（二世宗信神の御事）申し付置くへし併し常八殿人は天照大御神と一躰のものでムると仰せられ又御門迄御出ましになりて常八殿人は天照大御神と一躰のものぞと宣ひて御門外に出させられたり夫れより宗信神は御祈念に御掛りなされ常八も御拜を爲し居る所へ教祖は拾町余も御出で遊ばさるゝかと思ふてころ又々御立ち歸りになりて常八の後により玉ひて思ひがけなく常八殿人は天照大御神と一躰のものぞと仰せられし其御音聲は怜も頭上に大雷の落ちたるが如くなれば常八は心魂に徹し思

はず低頭平身し心の底より難有なりて彌々人は大御神と一躰なる事を覺り是れまで腹中に積りし陰氣俄かにくじけて只難有く嬉しき心になり且つ教祖神の大御神と御一躰なることを操り返し教へ給はりし御深切なる事を思ひ感涙にむせび居りし内御祈念も濟み御神札を戴き宗信神に向ひ厚く御禮申し上げ歸宅せしは早や夜に入りたり（鹿忍村より大門に入りて内の樣子を窺ふに家内中の聲餘り高く聞ゆる故何事ならんと内に入りて見れば不思儀や迚も此世のものではなかりしと思ひし悴は臺所に出で高らかに嘶なぞしてありぬ實に夢かとばかりに思ひ委細の始末を尋ぬるに悴の云ふに父上が今項は大元へ御着き遊ばされしと思ふ項より何となく氣分すがゝしく身体も自由になり余りの嬉さに起き揚り御飯も安々と戴き何の苦痛もなく平日の如くなりたれば此の難有き嬉しき次第を早く御聞せ申さんと只管御歸りを待ちつゝ病中の事を噺しなぞして家内中共に御神德の尊き事を思ひ御禮を申上げて居りし央なりと答へければ常八も教祖の御說諭によりて俄に陰氣を去り心に明りの入りたる次第を物語り夫より家内一同神前に向ひ神言を奉讀して厚く御禮を申し上げたりとぞ

因に云ふ斯道は病氣の治るを以て足れりとするにあらず病の治するが道の入口とも示し玉へり世の人多くは病の治るに付きて神德の難有き事を知り夫より段々手厚くなり遂に人は日の神と御一躰にして限りなく天地と共に生き榮え天を樂しみ命に安ずると云ふ道の蘊奥に遡らるゝ手はじめなれば病氣の治るも亦難有きことならずや

◎御教示に依り悪漢善人となる

備前國邑久郡山田村に木綿商賈を營める龜藏と云へる者ありしが性質惡漢にして人々を困しめる事度々なれば近隣の人々は毒虫の如く恐れ嫌ひしが兼て全村の名主役を勤め居らるゝ常太郎と云へる人龜藏の人となりを憐み度々説諭をすれども更に改心の色見ざりしが或る時常太郎氏の娘腹痛し三日に及びしも更に治する模様なかりしより全家は豫て御道手厚き信仰者の事なれば教祖に御祈念禁厭を乞ふの外なしと思ひ人を遣はして願ひ出でんとせしも折惡しく農繁中の事なれば頼むべき人もなく折から彼の惡漢龜藏の事を思ひ出し彼を遣はし一は御祈念を願はしめ一は教祖の御訓誡を受けて改心せしめばやと夫れより龜藏を呼び寄せて申すには是より大元へ行き娘の腹痛速に平癒するやう御祈念を願ひくれと頼みしに全人は曾て神佛に參拜せし事もなき無信心なる惡漢の事故辭退せしを再三再四强ひて頼みしかば名主より達ての頼みなれば敢て否むも如何あらんと思ひ遂に頼みに應しければ常太郎氏は直に御初穂外に龜藏に御説諭を願ふ書狀を認め龜藏に托し遣はしけり偖て龜藏は直ちに大元へ參拜し右の祈念を願ひ上げしに教祖御祈念ありて後龜藏を側近く呼び寄せ玉ひ仰せらるゝに能く祈念致したる故其許は是れより歸村し常太郎氏の娘に御禁厭を施せよと宣ひければ龜藏は意外の事にて呆れつゝ私は是れ迄信心せし事なきものにケ樣の御命を案外致せり恐れ多き事ゆゑ平に御斷り申し上ますと述べければ教祖は少しも苦しからず拙者の代理と心得必ず禁厭を施すべしと懇ろに宣ひければ

龜藏はやむなく御受け致し此の時教祖は龜藏の手の平に御陽氣を吹きかけ玉ひしと聞けり夫れより龜藏は早速歸村し常太郎氏に右の趣きを逐一物語りければ常太郎氏は大に喜び直に龜藏に袴を着用せしめ平常に異なり上座に直しければ龜藏は教祖の御教示の如く御禁厭を施したるに奇妙にも娘の腹痛は朝日に霜の消ゆるが如く即座に平癒しけるにぞ龜藏は夢の如き思ひを爲し黒住先生樣の仰せとて我々如き無信心なるものにでも斯る靈驗の顯はるゝとは實に恐れ入りたる次第なりと御神德の高大なるに感激し我是まで惡事を爲し世に毒虫の如く恐れ嫌はれしを我獨り强きものゝ樣に思ひ居りしは全く心得違ひにて思へば々々我ほど世の罪人はあらずと遂に前非を悔悟し大に改悛する處ありて從來の罪穢を償はんとて直に御道に入り一

意專心に善事を勸めけるにぞ聞く人々我も々々と禁厭を依賴し來たるものの夥しく後には駕籠にて招待する樣に立至り隨て靈驗著しく到る處より招待を受くる抔益々盛んに斯道を修行し衆人の模範となり世の裨益となりしと或人龜藏の人となりにして斯かる靈驗の顯はるゝを訝かしく思ひ教祖神へ其由を御尋ね申し上げしかば御庭前の梅の木を指ざし玉ひあれを見給へと梅の幹には花なくして次第に太り苦つきて美事にはあらず又下枝の花は小さくして香も尠し若すばへの花は花も太く香も高ひけれども實が入らぬもので古門人は下枝の如くにて實を結びます龜藏は若すばへの如きものでムると仰せられしとかや

因に幹は教祖の御事なり教祖は天命直授の神傳を得玉ひ身も我も心も

捨て天地一体の御高德なる故其足跡を踏みしものは梅の梢の如きものなる事を味ふへきことなり

◎陰氣を轉して頭痛癒ゆ

教祖神岡山近在の或る大家の内より御招待申上御出遊ばされしに其家の内室俄かに頭痛發し困難云はん方なく苦痛に堪へざる狀を御覽ありて仰せらるゝには此の頃頻りに早疔といふ病氣が流行の樣子である早疔といふ病氣は少し腫物が出る氣味があるや直に熱發し見る間に大患となりて全快するものは餘りなき樣子に聞けり實に恐しきことなり然るに貴所は頭痛にて御難義なれども此の熱氣の樣子にては彼の早疔が腰より下足のあたりに出るかも知れず頭痛は心配もなけれど早疔は恐しき故少しも油斷はなりませぬ

能く病人に氣を付られよ若し早疔の氣味あり流れば早速申越されよ祈念いたし參らすと云ひ捨てゝ御歸館のちせられたり扨て内室は俄に早疔が心配になりて腰のあたりより足のあたりを頻りに氣をつけて居れども出る樣子もなく其夜も早疔が心配にて眠りもせず心に掛けて居りしに明朝に至りても何の氣味もなく先づ安心なりと思ふて居る處へ教祖神又々入らせ玉ひければ内室教祖神に向ひ先生樣の仰せに依り晝夜腰より足のあたりを氣を付て居れども未だに早疔の出る氣味もありませぬ是れは全く御蔭で有りました と申上ければ教祖神莞爾と笑ひ玉ひ夫れは御仕合でありました然るに昨日より苦痛致されし頭痛は如何やと問ひ玉ひければ内室パッと膝を打ちて先生樣早疔が心配にて頭痛の事はサッパり忘れて居りましたと申上て家内中

大笑ひせすと云ふ。

因に云ふ教祖神疑ひと臆病が去らねば御蔭は顯はれぬと諭し玉へり。島翁の道歌にも臆病が病氣の中の親病氣四百四病を產みいだすなり。と詠せられたり臆病は物思ふ病ひと云ふことにて痛む處ばかりに陰氣か集りて先きへ〳〵と物思ひするゆゑ痛む處はまず〳〵痛み遂に大病となりはかなく此身を終る事の多きものなり夫れゆゑ頭痛の爲めに頭上に陰氣の集りしを下部に引き下げて臆病を去らしめし御諭しならん乎。

◎御神德草木に及べり

教祖御在世中岡山に住居せる某なるもの常に寵愛せし桃の木の枯れたるをいと惜しき事に思ひ教祖宗忠神に呪を願ひければ教祖筆を執り玉ひて三千歳になるてふ桃の齡をば君にゆづりて万代やへん。と云ふ御歌を短冊に認め給へば其短冊を枯れたる桃の枝に結び付けしに奇しくも其桃の木に日ならずして芽を出し元の如く生々と榮ゆたりと又夫れに續きたる靈驗あり是れは明治廿三年二月一日の事なるが美作國東南條郡高倉村なる木多百藏氏方にて斯道の高弟安藤十朗先生說教を務められたるが翌二日の朝百藏氏は先生に向ひ私し宿の梅の木花の咲く頃年々にアマコ付て實を結ぶ事絶えてなし何卒御禁厭を願ひますと申しければ先生は先づ御祈念ありしが祈念中不斗一首。これや此東風にあまこを吹き拂ひ殘るは梅の誠のみなり。と浮みし儀認められ梅の枝に結び付け御神水を注ぎ置かれし處不思議にも

夫れより后は側の唐桃や小梅等には花多く付きしも彼の梅の木には虫しも虫氣無くなりて其春よりは年毎に花咲き實のりしかば人々御神德の貴き事を大に感せざるものはなかりしとなん

因に云無情の草木さへも如此神庇を被れりきして人たるものは神德の尊きことを知らずんばあるへからず然るを形の病氣災難の爲めに御分心を傷め苦しむるは實に勿躰なき事ならずや愼しむへし〳〵

◎御高德よりて酔酩人逃げ去る

敎祖宗忠神御在世の時岡山に松尾長三郎と云ふ武人あり此人酔酩の餘り猥りに刀を拔き道路の人を切り伏せし事多かりしが或時備前國美野村の法界院と云ふ眞言寺に法會の式ありて遠近の老若男女は我遲れじと早朝より引

も切らざる參拜人にて寺の門外より門内にかけ茶店菓子店或は飲食の露店等を張り盛大なる會式なれば信心三分遊び七分にて出掛るものも多かりけり其時彼の酔酩人松尾長三郎も出掛けて大酒し殊の外酩酊して持病の酔酩を發し歸りの道々刀を拔き當り次第に辻切しつゝ岡山指して歸りしが折しも敎祖は内山下なる大夫の内へ入らせられし御歸路岡山城内西の門にて長三郎に出逢ひ玉ひしかば思ひ掛けなく長三郎刀を拔き上段にかざし既に切らんと進み來る敎祖は事の不意に出でたれども少しも驚き玉はず靜かに御場所柄で厶ると御聲をかけ玉ひしかば長三郎は其儘地に倒れ伏して一時は生氣を失ひ稱ありて起きあがり急ぎ刀を鞘に納めて逃げ去りたり其後古門人此の事を聞き敎祖に向かひ先日酔酩人に出逢玉ひし時の御心は如何ま

りました實に恐れ入たる御高德なりと申し上たれば教祖は長三郎切りかかりしとき受ける間合ひはありたれども何分御城内の事ゆゑ御場所柄でムると申しゝのみにて何も私に德はなけれども此の物を平生よく殺してあるで切るへきものはなひと云ふて御身をたゝき玉へりとぞ

因に云此物を平生よく殺してあると宣ひし此ものとは形なり形から起る惜ひ欲いの人欲憎ひ可愛の彼我の別負けまい劣るまいの我慢を去る事にて是れ等は皆形より起る人欲なり其形より起るものを殺して無きものにすれば日の神より受て具へたる心のみなり心は則ち活物にて活物は直に日の神なれば我々にても今日形より起る人欲を去るときは此身此まゝ日の神と一躰にして生通しのものなることを悟るへし

或る歌に。太刀や矢や病はおろか鬼おろちなに恐らめや日本魂。此の歌の意をも味ふへきことなり

◎御講釋を拜聽して即座に肺病全癒す

備中國賀陽郡（今は吉備郡となる）舊高田村にて大庄屋役を代々勤められし千原氏の男千原藤左衛門（後左五衛と改たむ）といへる人は性質温和にして物を苦にするたちなるが二十歳ばかりの時より肺病を煩らひ年を重ねて衆醫の診察治療は素より大家の事故能きと云ふ事には手を盡したれども追々衰弱病氣ます〳〵募り地方の醫師も難治の症と申し、より父母は申すも更なり親戚又は出入の人等も種々心配しけるに其當時元作州勝山の人にて石井宗軒と云人長く長崎に於て醫學を修行し岡山市細堀にて開業し種々難病も藥功ありて治

りしと聞き招請すると雖ども病家多くして他出は斷はると云ふ事に付止む
なく岡山へ參り診察を乞ふ事に決し藤左衛門氏（二十二歳）を駕籠に乘せ看病人
両三名も付添ひ少しも駕籠の動かざる樣誠に靜かにソロ〳〵と歩行參り途
中茶屋に一ト休せんと云ひし故駕籠を下し中より藤左衛門氏人手にすがり
出たれば茶屋の老婆是は見違へて居ました貴所は千原の若旦那樣でムるか
マア〳〵貴所如何なされた常に變りて痩せ衰へ王ふと申せば藤左衛門の答
に昨年より床に付肺病にて難義致し居りし處岡山細堀に能き醫者が來りし
と承はり夫れに診察を受け度くと思ひ漸くこゝまで參りしも余り難義なる
故チト休みて往さたらばと思ひてお邪魔致しますと語りければ夫れは々々
御難義御氣の毒に存じます肺病と云ふものは中々藥のさかざるもの〳〵由に

て此の村にも肺病人あり二三年も煩ひて色々治療を致しましたけれども其
功なく中死と定めて居ましたが奇妙に治りましたゆゑ其岡山の醫者に見て
貰ひなさるゝよりも岡山の少し西に上中野と云ふ所がありますが此の村に
黒住さんと云ふ神樣が出來まして右の肺病煩ひし人も其黒住さんの御蔭で
近頃は達者になられました今日も農業を働て居られます私も先頃齒が痛み
色々致しても治せざる故黒住さんへ參りまして御禁厭をして貰ひますと即
座に治りまして難有く思ひ人さんにも御知らせ申します丁度此隣の嫁さん
は眼病にてサッパリ見えぬ樣になりて居りましたが黒住さんへ二三度參り
て今は誠に能く見える樣なりて悦んで居ります其外此近邊は申迄もなく皆
遠方より參る人が日々續きますドウカ貴所も黒住樣へ參りて御蔭を御受け

なされバッィ治りますと懇々誠心を以て勸めけるゆゑ藤左衛門氏もフト其氣になり上中野を指して參りしに丁度五月廿七日にて御會日とて岡山より士族方鎗を立させ參られしもあり數百人の參詣にて有りける藤左衛門氏は其中に寢間着ながら駕籠より這出で座に付其内教祖は御高座に御進み御講釋在らせられしも聞馴れぬ事にて始めはボンヤリとして居りしになんと皆機人の形の上には段々等紙が厶りまして一ト村の内にても頭分あり又庄屋と云ふ役人かあり小前の者は其人々に頭を垂れ敬ふものなり又た郡中には大庄屋と云ふ御役人がありて庄屋衆が至て敬ふものなり其大庄屋の領に御上の御役人が段々ありて大庄屋衆がイト敬はれることである其御役人も段々頭が有りまして夫々敬ひなさる事である其頭に御家老樣といふ御方がありまして是れは又至て御けんしきもあり一同敬ひ奉る其上に殿樣（國主或は城主の事）と申し奉る是は其國々の一番大將樣で其御領内の人々尊敬し奉る至て尊ひ御方かム厶る一寸何處ぞへ御出と申せば道を直し盛砂を致し床の上にも居る譯に參らず庭等に莚をしき愼みて拜ひ事で厶るが其殿樣方の上に將軍樣と申して殿樣でも直に言葉を掛け奉る事も出來ぬと云ふ夫れは〳〵誠に尊ひ御方が厶る此御方は日本中の事を御自由になさると申す程の御方で實に尊ひ御方で厶る又其上に天子樣と申し奉る大君樣が厶りまして是は又た將軍樣でも容易に御前に出る事も出來ぬ程の至て尊ひ生きた神樣が厶ります其天子樣の御先祖は天照皇太神宮と申し奉りて神々樣の中で一番尊ひ其御德の高き事何とも申上方のなひ神樣が厶る其尊ひ皇太神宮樣の御心も世

の人々の心も同じ事でムるが何んと皆々様尊ひ事ではムらぬか形上には夫々禮義を盡さねどならねども心は則ち天照大御神の御分心で皆様の心ぬくもりは取も直さず天照大御神御一体でムるぞと仰せられし時藤左工門心中に思ふに我親は大庄屋を勧めて居ても郡中の人々が敬ふなり若し殿様が御入と相なる時には殊に座敷を建て器物を更に調へ此上もなき名譽とて一同恐悦に存ずることなり此上の將軍様は天下様と申して下々の者は御姿を拜むことも出來ぬ其上にまします天子様と申し奉るは實に生きた神様である其先祖たる天照皇太神宮様の御心と吾々の心と一体なり又日の大御神様の御分心を戴て人と生れしものぞと仰せられしは何ともたとへ方なきいとも尊ひ人の心で有ると思ひし跡は夢中となり何を仰せられしか更に覺ぬ申さず只管平身低頭して居りし心に御禁厭をと仰せられし御聲耳に入り我が事の樣に思はれフト頭を上げ見受たれば數百人參り居られし方々は一人も居らず只自分一人忙然として居る故さては覺ぬ知らず氣絶して居りしかと心付き身の上を見れば着物は素より寢間着まで汗に濡れ疊まで濕り居り私しは此の通り汗に濡れて居ます故御呪は戴かれませんと申し上しかば夫は決して苦しくムらぬドウカ此方へと仰せられしにより恐れながら座を立て心身を輕くなりて平日の如く心はスガ〳〵しくなり御禁厭を戴きければ夢の覺たる如く胸は素より惣身更に苦痛なく其嬉しさ何とも譬方なく難有く思ひ奉り息も自由になり物を云ふ事もサワヤカにして厚く御挨拶申し上ければ敎祖宣はく貴所は岡山の定宿は何處でムると仰せられければ岡山には

余り正宿りし事なく定宿はムりませぬと申し上げれば左樣なれば私は是より岡山へ參りますから御同道申して大供の魚屋と申す信者の叮嚀な宿がありますから其家へ能く申し上げますと仰せられ夫より駕籠は釣らせ歩行にて教祖の御供致せり付添ひの人々は何んとも譯は分らず驚き入たる若旦那の勢ひと悅ひつゝ付從おて大供へ參り魚屋へ教祖御入遊ばされて此の人はケ樣〳〵の人にて今日御かげを受けられし故大切にして止めて下されと仰せ置かれ岡山へ御出になりたり其跡で人々風呂に入り私も久々振に湯に入りたしと申して風呂に入り至極心持よくなりしと御膳に据り久しぶりに御飯の味よく付添人は素より駕籠人足迄か若旦那樣あなたは平生の如く見ゑますと悅ぶゆゑ自分にも嬉しく實に是迄のことは夢の如く思はれ其夜は

快く休み翌日朝早く起き宅へ歸る積りにて大元へ參り教祖に面謁をなし御暇乞を申し上げれは教祖は今夕岡山の川手鐵屋平兵衛と云ふ家に御席がありますから今一度講釋をれ聞きなされよと仰せられしに付御言葉に從ひ其夕鐵屋平兵衛方へ參り御講釋を聞ば聞く程人の德が分り神樣の尊ひ事が知れ嬉しく益々身躰は丈夫になり病氣は全く平癒し實に其難有き事言葉にもつべ難し涙こぼるゝばかりなり早く歸りて此姿を父母に見せたしと其翌日大元へ參り教祖へ御目にかゝり御暇乞を申し上げれとお歸りを御急ぎなさるは御尤でムるが今夕は番町の長泉寺にて講釋を致しますから今一度講釋を聞い御歸りなされと仰せられし故畏りましたと申て又も其夕番町へ參り御講釋をきゝ爾益々難有くなりて是から信心をせねばならんと思ひ中之町

にて水晶の珠數を買ひ教祖へ御暇乞して嬉しさに駕籠をつらせ歩行して我家に歸りければ両親は素より一家一族は驚くの外なし如何なる名醫の治療にて有りしか歩行して歸るとはさても〳〵不思議なるかな嬉しき事である と一同悦び先づ座に付き其事情を尋ねける藤左衛門はヶ様〳〵の事にて醫者の處へは參らずして大元へ參りて御蔭を戴きたると委敷咄しふに両親を始め一同御神德に感佩し大元の方に向ひ禮拜をなせりと其翌日は平生の如く門前の田を植る差圖を致し其翌日は六月朔日にて御禮のため大元へ參り御門を這入とき教祖は御玄關にて千原さん御手柄〳〵と仰せられ又段々難有き御咄しをも仰せ聞せられしと夫れより神文を捧呈し手厚き信者となり二代宗信神の天心號を授かり先生と相なりて斯道を開き多き人々をたすけ

仁を施せり或時飯にッチゴと申す病付て竹悉く枯れけるを千原氏人の病の治る位なれど此の病も治らざる事なしと鍼に御呪致し置れしに其鍼青々と元の如き竹となりしより衆人神德を尊みける宗信神の御勸の中には毎度御前講を勸められ長壽して屈指の先生となりしとかや

因に曰く教祖御在世中信心をすると申せば珠數を買と云ふ佛道の盛なるを押して知るべし殊に備前法華と他の國々の人も申し佛の盛なる地に教祖御降誕ましますは御神慮あることか又肺病は一旦御神德を戴きても又再發するとか或は容易に治らぬと申し傳へて矢張り其人々の心に疑と慮病が離れず自ら其病を捉ゑて放さぬ故なり現今にても肺病の治り形ち太り楽を務め長壽する人幾人もあり若し肺に罹りし人は疑と

臆病を離れ斯道にて如何なる病も治せば治る事と確信すべし

◎鎮魂の修業に感佩す

教祖神御在世中に岡山藩大夫池田伊賀殿の屋敷へ參られ病者の御祈念中落雷(教祖の御座を離れて漸く七八間脇に落つ)ありしに教祖は少しも驚きなされず相變らぬ御音聲にて御祓ひ御修業ありて御禁厭を授けられ後御道の御話しなど御坐なされしも一口だも雷鳴のことは仰せられず尚落雷の事をば御存じなきが如く毫も御心に懸けさせ給はざりし御樣子なり他の人々は大に驚き一方ならぬ狼狽したるよしなるに教祖は所謂眞の鎮魂と申す場合を御務め遊ばし居らるゝと人々大に感心致せしなり斯の如く御鎮魂の御大德の御呪ゆる病める人も直に御蔭を蒙りて病癒えたりと誠に尊き雜有きことなり

◎家政の回復并御書翰にて神德を知る

美作國勝北郡中島村桑村八郎治(美作へ住居して八代續きしを以て八郎治と名付(氏は元伊豫國河野氏の裔孫にて代々大庄屋といへる役を勤務せしが八郎治氏の代に至り家計困難にありし爲め心を傷めける時赤木先生を招請し一家困難の事情を物語しければ先生の云るゝに何富は四季の循環するに同じことなり僅か金錢の爲めに大御神より受けて具へたる大切なる御分心を痛めては天に對して此の上もなき罪なり必ず々々心を傷めぬやうに養ふべしと諭されけれゞ大に感ずる處ありて何事も自然に任せて心を養ひけるにご其後八郎治氏の二男北海道に赴き物産繁殖の業に盡力し終に函館にて百萬圓の身代となり尚長男も富裕の身となり八郎治氏は七拾五の齡を經

て其身安樂壯健にして地方の公益を計り郡中にても古昔の大久保彦左衛門の如き人なりと衆人大に尊敬せりと而して仝人方には兼て教祖神の御書翰一通を携帶しけるが過る文　四年子正月十五日仝村又右衛門と云へる人上納米千五百三拾石積江戸表へ廻船を仰せ付けられ又右衛門海上を氣遣ひ桑村氏の秘藏せし右の御書翰を借り受け夫れより備前金岡湊より仝月廿二日出帆し二月一日遠州沖に掛りしが俄かに風雨烈しくなり終に又右衛門の乘りし船は沈没しけれど乘り組員拾七名は端舸に乘り辛じて灘近く漕ぎ寄せし波風の爲めに又も轉覆し漸く船板繩などに取り付きて曉頃上陸し悉く一命は助かりたりされど又右衛門は大切なる御眞筆の御書翰殊に借用物の流れたるを憂ひ右三日目に身体丈夫になりしより濱邊に出て一心に教祖神

を拜し命の助かりし御禮を申し上げ尙御手紙の地方に揚るやうにと一心不亂に祈念を爲し居たり此に小さきもの波に漂ひ濱邊に寄り來るにぞ之を眺め居し者あり近く寄り來れば一個の柳骨なり直に取り揚げ横須賀西尾隱岐守殿の出張先へ屆出で柳骨を開き見れば金銀百五拾両と彼の眞筆の御書翰なり其外の物品とも少しも濡れ居らざるに一同不思儀に思ひ其由を又右衛門に御尋ねに相なりし處仝人の申立と拾ひ揚げし物品と聊かも相違せし廉なきを以て直に下げ渡され又右衛門の喜び一方ならず暫しの間は嬉し涙にくれて何の言葉もなかりしが稍ありて御道の難有き事抔逐一物語しかば一同大に神德の廣大なるに感激し出張の御役人より該御書翰を百両にて讓り請けたきと乞ひけれども仝人は人の移藏を借出し品故之れに應せず破船裁

許も濟み又右衛門は江戸へ參りて居りし處又も出張の御役人より尙百五拾
両にて必ず讓り受げさせ呉れよとの事なりしも仝人は該御書翰は實はケ樣
々々にて他より借用せし品なれば讓ること出來がたしとの旨を以て斷然其
意を謝し鄕里へ持ち歸り桑村氏へ返却せりと今尙桑村氏の宅に秘藏しあり
と云ふ

因に云桑村八郎治氏は本年七拾五歳にて至て壯健にして今に米壹表位
は荷ひしと云ふ津山へ四五里距り居も下駄にて達者に往來せり二三年
前函館の息子より參れと屢々申し越せしに付其意に隨ひ往ひて長く逗
留し歸途所々の名所舊跡を廻り充分遊びて歸らるべしと申せしにより
十ケ月計りもかゝりて諸所を見物し種々の品など求めて歸りたれども

漸く壹千圓位しか費さゝりしッヲ々々思ふに斯道がなくして赤木先生
の御出が無かりせば今は土となり家も貧しかりしかも圖られざるに先
生が借金位の事に大切なる大御神の御分心を傷めては恐れ入る次第命
こそ大切なれ金はいつでも出來る抔論されし事の心魂に徹し忽ち陰氣
を去りしゆゑ病は治し身代は先代よりも富裕になり實に安心なる身の
上となれり今は別に家業等は爲さずとも公衆の爲め筋而已世話して樂
しみ居るなり思へば思ふほど斯道程尊き有り難き事はあらず他の道に
ても一心誠を以て願る時は必らず驗は顯はるれども新禱と云へば夫
れ々々の作法ありて容易ならざるもあり然るを敎祖神の御德に依りて
は或は山林に入り若し腹痛とか何とか急病を發し又は怪俄等致し醫師

を招く間もなき時にても禁厭免許の人が居合せなゞ直ちに禁厭を施して即刻に其苦痛を免ぜれて平癒し又田畑抔にて俄かに病氣を發する事ある時には肥しを荷へる人にても其荷を卸し御禁厭の御取り次ぎを致し其場に治る事多々あり實に尊く恐れ入りたる御神德なり是を軍人等に知らしめ信仰あるときには戰中に於ていかゞかりか神德顯れて國威を輝す事ならん教祖神詠の。天照神の御德を世の人に殘らず早く知らせたきもの。でムるとシミ〳〵桑村氏の咄に感佩す又曰本文三日間も海水にありて少しも濡れざりし御神筆の御手紙の御文意を此處に記したくと思へども尊き御文章ゆゑ略す

◎狂人御蔭に依り平癒す

安政年間に二世宗信神伊勢太廟へ信徒を誘ひ千人參りを遊ゞされし時大和國奈良町なる鶴屋へ御止宿の際此の度備前より生神樣の御通行なれば此の御方に御禁厭を請ひなば如何なる難病と雖ども治せざる事なしと云ひ傳へ遠近の老若男女別なく我も〳〵と宗信神の御旅館へ參集し御禁厭を載き御蔭を蒙りし者多かりしとぞ尚聞き傳へて山なすばかりに集り來り其中に某村の豪農と聞ゑし某の長男が其以前より發狂したれば家族は素より親族の心痛は一方ならず遂に一の座敷牢を造り發狂人を入れ尚番人迄も附け病の治するを待ち居りしに更に治するの模樣なく只大聲を放ち或は衣類を裂き齒噛をなし居るは誰人も之を人間の所業とは思はず惡しく云へば狐狸の祟りとか種々に云ひ居りしが斯かる處へ彼の參宮の人達通りかゝり其聲を

聞き樣子を尋ね氣の毒に思ひ御禁厭を受けさせなば必ず治すべきものなるにと語り合ふ矣に同勢六七人後より來りて君達は此に足を留め居らるゝは何か樣子の在る事かと尋ねられ成程此度は格別の御神緣にて宗信樣の御供を致して斯く參宮の途中多人數御蔭を載き誠に有難き仕合にて勇んで此處迄來掛りしに此の内に大聲の聞ゆる故樣子を尋ぬれば發狂者のよし實に憫然なる者なれば御道の御禁厭を施さば其の身は素より一家親族に至る迄も喜ぶべしと思ひ居る所なりと云ひしかば全勢の中なる枝田美喜治氏其外両三名は此の御道にて活しなは人は素より萬物として活きざる事なし活すこそ道の本体なれはイザ諸共に活さうでは厶らぬかと牢の邊りに進みしかは側に居る番人之を押し止め貴所方は何處から御出かは知らねども此の者

は發狂人の事故かくの如く此の中へ手足を縛り繋ぎ居れは人聲や物音すると荒れ廻る故に早く去り玉へと云へるを以て枝田氏を始め外諸氏は先き程よりの次第を物語り牢の窓より窺ひける其時赤木宗平氏忽然大音にて吾等は備前黒住の門人にて此度宗信先生の御供にて伊勢參宮を致すものなるが路すがら御德を蒙りしもの多かりけれは汝も日の神の御德を難有く戴けよと申されしに彼の荒れ廻る狂人は俄かに手を合せ首を垂れて只默然たり諸人扨ては御德を蒙りしなるべしと番人に云ふて戸を開き縛りし繩を解かしめ夫より彼れに禁厭を施す内高鼾にて眠りに就きしを以て諸人は最早御神德を戴きしなるべしとて其場を立ち去らんとせしかは番人は又もや手足を縛らんとせし故諸人は斯く御德を蒙りし以上は素より平常の人と異な

る事なければ他人よりも神德を疑ひて縛るなどして却て御蔭を取外す事あれども其儘にして安眠させよと篤く諭し置き宿を指して急きける跡に發狂者は眼を覺し起き揚れり番人は大に驚きソデコソ暴れ廻ると懼れけるに不思儀や發狂者は齋穩かに我は何故ケ樣なる處へ繫がれ居るやと問ふより問はる、番人はあきれ果てお前は何故病が治りしやと押し返して尋ねければ狂人は前言を繼て我が牢中に居りし始末を尋ぬるにぞ番人も一伍四什の事を物語りければ發狂者は我身ながら不思儀に思ひ恰も目の覺めたる如くなりと是より全く治したれは家内親族共は打寄りあら有難や々々と嬉し涙にくれ一言の言葉もなかりしとぞ夫れより神德の尊き事心魂に徹し兎も角も今一度御禮申上げたしと夥多の人をして禁厭を施されし人の居らるゝ長谷の宿に使はせしに多くの人の中に過刻禁厭を施されし人々ありたれは懇に厚く禮を述べしに一同も尚さら難有く思ひ聲高らかに伊勢は津でもつど歌ひつゝ目出度參宮せられしと又彼の村の人々神德に感佩し敬神の意を起し近村迄も神德の高大なる事を知りしとぞ

◎旱魃に太雨の御蔭を被むる

安政年中大旱魃にて稻は將に枯れんとしけり農民の因しみ云はん方なく其時美作國津山近在の信徒等申し合せ第二世宗信神を聘し雨乞の御祈念を乞ひたれば難有や俄に一天かき曇り條を突くが如き大白雨降り來れり農家の喜び一方ならず然るに全國久米郡坪和の里は用水稀にして天水受の田地多し旱魃の折りから右の咄しを傳へ聞き此の里にも黑住の先生を招請し雨乞

の御祈念を願はんと申合せ則ち御招待申上御祈念ありし處即日又も大白雨降りて谷川にも水溢れける其時斯道の古門人清水正太郎氏宗信神に向ひ貴殿は如何なる術を以て雨を降らせ玉ふや其術を教へ玉へと懇ろに願ひけり宗信神の御答へに別に術も秘傳もありませぬと被仰ければ押返して併しながら此炎天少しも雲なきに不思議なるかな御祈念中に此の如く雨の降りしは如何なる術の有りしや是非とも御教へ玉へと強ひて願ひけれど宗信神宣ひしに別に秘事はなけれども雨を祈れば雨が降るで有うと思ふ位では降りがたし雨を願へば必ず降るものと我が心に雨をこしらへて疑と臆病を離れて祈り奉りなは必らず降るべしと諭されけれは其御言葉心魂に徹し大に覺る所ありて其后清水氏雨乞の祈念を行はるゝ度毎に雨降らざる事なかりしとぞ又仝氏伯耆國元八橋郡巡廻中阿波國より雨乞を頼み來し事あり其時伯耆にて御祈念ありしに其祈念の刻限に違はず阿州に於て十分雨降りしと後日禮狀を送り參りし事ありと聞けり夫ゆゑ何事も疑ひと臆病を去り誠の一心になりて神明に向へば神明感應ましまして自由自在の御陰が被むられる者と悟りたる事なり

◎威德鼠に及ぶ

教祖神第三代の裔孫故管長宗篤大人の御經歷を尋ぬれは嘉永元申年の御誕生にして生質温和正直なり九歳にして御父宗信神に離れ玉ひ夫れより高足の御門弟赤木忠春時尾宗道小林儉藏森金爲造等其他の古門人に就き教旨を研究し專ら布教に盡力せられし其功績及び神德靈驗の著しき事枚擧に遑

あらずと雖も其一二を擧ぐれは十五六歳の頃より寒暑を厭はせられす岡山市中信徒の方に於て講席を勤められし事殆んど毎夜なりき或夜十二時過き岡山より御歸宅（此時森住豊次郎氏隨行）なされ寢所に入らせ玉ふに神前に鼠出でガタ〳〵音さしけるが耳に障り褥の中より惡きヤツガと申されたれば早速音止めり其儘快寢し玉へ翌朝森住氏神前の掃除に取りかゝりし所不思儀なる事には大なる鼠神前に斃死し居たり依て其旨を宗篤殿へ申上しかば是は恐れ入りたり不入言を吐き殺生したりと反省して一層道の修行に御奮勵在らせられしとぞ

◎神誠朗讀中脹滿全癒す

明治十七年の春宗篤殿伊豫國へ御巡教中別宮中教會所にて御説教ありし時種々の靈驗あらはれし中にも最も高大なる即座に御蔭を蒙ひりしは全國越智郡日吉村檜垣熊吉妻なり此人長く脹滿と云ふ疾にて難澁致し醫療は素より百方手を盡したれとも治せさるに依り醫師の手術を以て水を取りし事も二回に及び其の度毎に惡水の一斗計りも溜り居りし由又追々腹膨れ身体更に自由ならす死を決し居りし折柄管長殿の御出張と聞き何卒參拜して御蔭を受けばやと思へども斯る大患の事故背負とも出來ず又人力車にも乘る事の出來ざるゆゑ種々工夫して漸く戸板に乘せ多人數かゝりて教會所へ連れ參り御神水瓶の前に座せしむ腹は太鼓の如く膝と腹と同し樣に成りし程なれは俯む事もならず只〳〵〳〵大息する計りなり然るに御祭典濟みて管長宗篤殿高座に昇り神誠七ケ條を御朗讀に成りし其間眞に難有く思ひ

一ケ條毎に心魂に徹し低頭平身して拜聽して居たり訓誡の末尾に至り立向ふの御歌御朗讀の時には疊に頭を摩り付け拜聽して居りしか風と起さて見れば不思儀に帶のゆるみ居りし故是れはと思ひつきぬれは脹滿病は如何なりしや水氣の一滴くも出たるにもあらず平生の如くになり氣分はスガ〳〵しくなり本人は素より千を以て數ふる參拜者も一同アッと一聲を揚げ互に顏と顏を見合せ則御神德の尊き事に驚かぬものはなかりし夫れより日を追ふて本復し家内一同信心手厚く家業を勉强し今に壯健なりしよし此時可突しき事あり今治町より一里計り隔て、波止濱と云ふ港あり此地の人々管長殿の御入りありしと兼ねての信徒は申すに及はす多人數參拜しけるに或る人更に神佛を拜みし事もなく神佛は無きもの、樣心得人の信仰致すをも誹

りあなどりける此人衆人に今日は多人數何れに行くぞと問ふに今日は黑住教の管長殿が別宮へ御入りゆゑ參詣致すなりと答へしかは然らは予も往きて其管長とか云へる者の面を見て遣ふとて寢間着のまゝ人々と共に別宮に至る管長殿は田坂氏へ御止宿にて祭典前正服を着し教會所へ御出になりしを道端に居並ぶ信徒は各々拍手して敬禮をなせしに右の波止濱の寢間着の人の前迄御出になると其男拍手して平伏せり他の同行の人此樣子を見て云ふに貴殿は管長の面を見て遣ると云ひしに何故手をつき拜したるぞと問ふに答へて云ふに拜まずに居らるゝものか管長殿は人間ではなひ神樣じや貴公方が信心するのも無理はなひと云ふて夫れより本心に改まり說教を拜聽し大に感じて信徒となりしとかや實に尊き事ならすや

◎自然に任せ玉ひし御功蹟

教祖御在世中沖田神社へ參詣遊はさるゝに二日市に（岡山市京橋の下流なり）渡し場あり此處の渡守六太夫と云ふものは兼て人と爭論を好み心得の惡しき者なりけるが教祖は蜂谷俊造と云ふ御門人を隨へ渡し船に乘り玉ひければ渡守の云ふには中野の先生さん貴殿は兼々自然に任せと仰せられますさふなが自然に任すが宜敷くムりますかと申し上げたれば教祖御答に何事も自然に任すが宜敷くムると仰せられたり渡守は其御答を聞くと直に舟を河中に出し櫓を揚げけるに其日は白雨にて出水の折柄なれは舟は早く下へ流るゝゆゑ蜂谷氏は短氣の人にて船頭を呵らんと思ひ教祖の御顏を伺へは只莞爾として在します故蜂谷氏も呵る事も出來す其内舟は遙か下へ流れ行く又呵らん

と思ひ教祖の御顏を伺へは矢張り泰然として莞爾し居たまふゆゑ呵る譯に參らす然る内に追々流れて三蟠と云ふ處へ近くなり是れでは海迄も流れ出づべしと蜂谷氏は心配致し今度は嚴敷呵らんと思ふ内舟は板尾の雁木と云ふ處へ横付になりけれは教祖は船頭大に御苦勞であつた今日は沖田神社へ參詣致さふと思ひ參りしに御蔭にて歩ますして爰迄舟で參り此處より宮道にて丁度よかりしと仰せられしかば船頭は恐それ入り何とも得言葉を發せず只教祖の御顏を拜し忙然として居る蜂谷も其船の自然と板屋の雁木に付と云ひ流るゝ船中御平氣にて只莞爾〳〵遊されて何とも仰せられずして居らるゝ段恐れ入り一層信仰の心を彌增したるよし夫より船頭は水勢强きに舟を登すに困り中野の先生は實に恐れ入りたる御方と感じ後には六大夫も

信者となり心得方も直りしとかや

因に曰く教祖は隨行のものに今日は何地へ行とも仰せられざる事多きよし此の沖田神社へ御參拜の事も蜂谷氏は知らざりしを以て水勢は強く船は激流に從ひて流るゝゆゑ大に心配致したる由神詠に「天地は廣きものかと思ひしに我が一心のうちにこそあれ」此神詠を伺へば天地は只一心の中にありければ形の事を忘れ日の神より受けて具へたる心のみになる時は天地の間は自由自在になるものと悟りたるものなり

◎怪物消滅す

教祖御在世中岡山市に化物の出る家ありて長らく住居する人もなく戸を閉ぢて誰も行く人もなかりしが或人是は墨住大先生に御祈念致し貰ひなば化

物が出ぬ樣になるべしと評議一決せし處幸ひ教祖神御通行あらせられしに付右の次第を申上御祈念の程願ひ出でければ教祖早速承知したまひ宣ふに何分人の住居せざりし家ならば近所の人々集りて戸を開け能く掃除して置き成さるべしとの御事に付能く〳〵掃除して置きたれば其後教祖御入になり御祈念遊ばされ是で最早何も出ませぬと仰せられしが其后は更にあやしき事なく夫より人の住居して繁昌したるよし是に付き或人教祖に申し上げゝるに先日は何町の化物屋敷を御祈念遊されしよし其后は何事もなく住居して繁昌し孰れも感佩なし居れりと申し述べければ教祖あれは戸を閉ぢ御陽氣の這入ざる樣ふせしゆゑ陰氣集りて色々の怪しき事がありしならん人の身にも御陽氣が足らぬと病を生じ色々と奇怪あるものなりと仰せられし

とかや

◎魂の幸ひにて難病癒ゆ

神代にも大巳貴神の幸魂外國を開き度く思し召されて歸り玉ひしと古書に見えたり德を備へたる人々は顯在幸魂の活動あるものと思はるゝ恐れ多くも敎祖御在世中岡山藩士岡山細堀と云ふ町に住める石田鶴右衛門なる人江戸詰めの時なるゞ藩主御歸國の時石田氏は江戸に居殘るべき筈なるも病氣の爲め歸國致させたきとの事にて御供被申付其道中追々病氣(瘧癧)差重り播广國大藏谷迄歸られし時には大患になりしかば御供落保養致すべしと申しつけられ止むなく旅館にて醫師を迎へ診察を受けゝるに最早治療の道なしと云へり(首一面にかたまり出來漸く咽の中央指一本位ひ柔ぎし所在り)本人も覺悟致し助命は致しまじく(肩にて息を致しつく息計)併し國に居りなば黑住大先生の御まじないを戴き助るかも知れざるに旅の空にて病に命をとらるゝはいとも殘念なることゝ心中に思ひ心を鎭めて一心に敎祖の御事を慕ひ家來の者は彼れ是れ心配致し看護に心を盡し今は臨終と涙ながら撫さすり等致し居る內風と病者立あがり玄關に出で頻りに挨拶致し頭を垂れて文元の坐に付あらゆりがたや尊とやと音聲平日の如く付添ひの者共は臨終に望み苦し紛れに發狂致されしにはあらざりしかと疑ひながら其故を尋ねければ先刻黑住大先生御入り下されて貴所御難儀をなさるそふですから御禁厭をして治して上げますと口中に指を入れ玉ひ瘧癧の根とてはうづきの中の實の如きものを片手に取り玉ひ手におまる樣に成りたれば夫を捨てゝ又片手に一杯取り玉ひ

しかと思ふ内アヲ不思議や息も安く出來身躰も自由になりそれを限りに全快致し平生の如く心すが〳〵しく成たりしより旅籠屋の勘定をも濟ませ明朝は歸途に付くべしと云ふ家來共は夢の如く更に合点參らずされども何分主人の九死と見ゐし大病も朝日に霜の消ゐたる如く治りたるを以て難有ひやら嬉しひやら手の舞ひ足の踏む所を知らすと申次第にて主從共に悦ひ翌朝勇ましく發足し岡山へ着き夫れより直に大元へ參り教祖に御目に掛り大藏谷にて有りしまゝを申述へ厚く御禮を申上けしかば教祖宣はく左樣でムりましたか更に知りませねども幸魂が往て働く事かあるものでムるから私の幸魂ならん兎も角も御治りなされしは何より御目出度ことでムると仰せられしとかや

因に曰く神詠に「姿なき心を活てつかひなば天が下にぞみち渡るらん」と人々我を離れ心を活しなば幸魂の働きゐりて病を治し又は諸難を免れし類ひ多し故に身体を以て爲す業には限りあり心の活動を以てなす業は其功大にして限りなきなり道の修行は心の活動が肝要なり禁厭も陰禁厭（肌付き又は紙に其姓名生年等を書く）と云ふて遙か隔てゝ居る人に呪して靈驗顯るゝ事多し是れ神德は素より心の活動幸魂の功德によるならん尊ぶべきならずや

◎贅　全　癒　す

宗篤殿は敬神の念厚く神前には現に神の御在すが如く畏くも　陛下の御前に出しが如く御謹慎ありて教祖神の御足跡を履み玉ふ御心構にて專ら道の

御修行在らせられたり明治十七年の頃より御在宅の時は寒暑の厭ひなく毎朝未明に今村宮へ御參拜あらせられしが或る時今村宮の社司今村氏の後室に途中にて御面會なされし處後室の申さるゝに私は追々年は寄りて參りますけれど別に痛む所も厶りませんが近來咽下に如此贅出で折々は痛を發しなんとなく邪魔になりまして困りますと述べければ宗篤殿夫れは豫て御聞なされても居らるゝ通り難有ひと云ふ事を御忘れ成されたのではありませぬかと申されつゝ其贅を手にて撫で玉しかば其夕かぎりに贅自然と無くなり翌朝は更に手にさはらぬ樣になりければ後室の喜び一方ならず宗篤殿の御宮へ御參拜を待ちかね門前に出でゝ厚く御禮を申述られし事あり又其後月を經て後室の咽下に元の如くに贅が出來しより宗篤殿の御參拜を待ち居

られて又贅か出來かけましたと申されしかば夫れはあなたの御心にコブが出來て居りはしませぬかと問ひ玉へば家事や子供の世話に日夜大コブが出來て居りますと答へらるゝ宗篤殿夫れでは其コブを御取りなされよ心のコブを取りさへすれば咽下の贅はなんのへんのなき事なりと又撫で置かれし處いつしか其コブなくなりし事ありとぞ

因に曰今村氏の後室は若き時教祖の講釋を聽聞なし御道の德を知る人なるが故に宗篤殿の御一言にても早く感せらるゝ所ありけるなり

◎曇り晴れて清眼となる

本教高足の御門弟赤木先生の斯道に入門ありし時の靈驗等は國の教第四拾壹號第四拾貳號に委しく記載しおれば爰に略すと雖ども人の身の上には時

として難あり或は病に罹るは形の上の持前の樣なるものにて譬へば明玉には塵埃も能く見ゑ明鏡は曇り易き道理なるが故に教祖は常の信心とは常祓とも示し玉へり赤木先生の如く神と稱する御方にても折々病に罹られしとも有りたり抑教祖神退り玉ひし後は世にまし〳〵し時の事を思ひ深く哀しみ且斯道の事をも案じられし餘り自然と眼薄らぎ日を追て又元の如き盲目となられしが其年（教祖神去り玉ひし年）の六月大祓祭の節人に手を牽れつゝ大元へ參拜なされ其道すがら思はるゝに如何であらうか人々が參詣しあれば宜かと案じつゝ大元へ着かれたれば教祖御在世中の時よりも參詣多く折しも御講釋の番に當りたれば高座に昇り其參拜人の拍手して喜ぶ聲を聞きつゝ實に教祖の御德は尊とひ事である御道は益々盛にならるへしと飛び立つ程に

嬉しく思はれて不斗眼を開き見れば一圓參拜人の顔も見ゑたりとぞ其時は格別に滿て難有き御講釋顯はれし事もあり又或る年先生大熱を發し大元より御祈念の神札も送り賜ひ其神札を病褥の間の天井に貼り付けて祭り一心に其神札を拜せらるゝ内フト浮みけるは「日と共に活さへすれば活らるゝ」と云ふて下の句は出でざれば繰り返し日と共に活さへすれば活らるゝと幾度も折返し讀まれしと雖ども下の句の更に出來ず一心を凝して居られしに誰言ふともなく大音にて「我から枯れて日月をからすな」と顯れ玉ふを限りに熱氣さめ全快致されし事もあり又山陰地方へ參られし時盲が開眼し躄が立ち或は不具癈疾も全癒し實に不測の靈驗顯はれし所より時の役人ども黒住は切支丹でもあろふかと疑ひ先生に退去を申し渡し黒住教を嚴禁し若し

黒住を信仰の者あれば悉く所分すると達せられし處より先生も誠の道の貫かざるは遺憾なりと心を傷められしが或は何か心に障りし事もありてか又自然と眼薄くなりしより大元へ歸られし時恰も宗信神の御講釋中にて其講釋に或る所に德の高き名僧がありて人々が活き佛の樣に云ひ自分も充分悟りを開き居ると思はれける其僧入滅し極樂へ往生は間違なしと思ひ終に閻魔の廳に至りけれど地獄へ行けと申し渡しおりて僧は案外して私しは現世にて戒を守り衆生を濟渡し能く道を守りたるものなりければ地獄へ往くべき筈なしあはれ極樂へ往かしめ王へと低頭平身して願ふと雖ども閻魔王承知致さず斯くする内に遙かに山の麓を登り掛けたる老母鬼の如き顏にてソロ〳〵歩行しけるを見て閻魔の云ふに老僧彼の老婆を連れて參れと申すに

付僧は山を下り老婆に向ひ早く登るへしと傳へければ老婆の申すには私は娑婆に居りし時は色々人を欺き嫉を憎み惡事と云ふ惡事を致さぬ事なし故に遥に見れば此山の上に青鬼赤鬼等か居るから登れは鑊に入れ熱湯の責め或は舌を拔かれ劔の山に逐ひ上げらるゝならんと思へば足が重くて如何も登れませぬと泣々申にぞ老僧の云はるゝには其樣に欺き恐るゝには及ばじ所々に御地藏も居らるゝ故其地藏樣を一心に御頼み申せば御救ひ御助け下さると懇々論しければ只管其言を信じ御地藏樣を便りに心を活し歩を進めて山に登りけるに今迄鬼と見なしも悉く地藏と化し老婆を助けて終に老婆が極樂に往生したる咄しがあると（講釋の前后述へられしとは略す）赤木先生心中に感ずる處ありて眼を開き見れば元の如くに清眼になり玉ひしとかや

因に曰く高弟方にても色々の御修行ありて終に生通しを得玉ふなり道の修行の明になるほど聊かの事にても心の曇り濁りとなり其曇り濁りは大御祢の御心に叶はぬ所より御修行仰せ付けらるゝもの成るが故に仮にも御靈を曇らさず濁さぬ樣生通しの修行したきものになん

◎七十歳の老母御蔭を蒙り若歸る

泉州堺市濱屋八百屋久兵衛氏と云へる人の母七拾余の高齢にして重き病を煩ひ長々病の褥に打伏して身体自由ならず日々に衰弱しけるが久兵衛夫婦は懇に看病をなし種々世間の噺などして老母の心を慰め長の年月少しも怠りなく孝心を盡し居たるが折しも赤木先生御席を開かれて種々御蔭の顯はれし事を聞き久兵衛の妻は老母に向ひ此頃當地へ備前より黒住の御門人赤

木先生と云ふ御方御出ありて難有き御講釋ありて御蔭を蒙りしもの數限りなき樣子なれを是より母上樣を背負ひて參詣致し度と申しければ老母は嫁の深切なるに感じて涙ながらに其深切は忝なふ厶るけれど身の疲れもわれば と斷りけり嫁は是非なく母の代參と心得毎夜々々參詣して歸るや否や母に向ひ講義の難有次第を語り聞せ母上樣も御蔭を戴きて早く御全快なされて下されと申しゝ言葉いと懇なれど母の喜び云はん方なく夫より何となく心易ましくなるに隨ひ病氣も快方に赴きたれば嫁の意に任せ貧はれて御席へ參詣し御講釋を直ちに聽聞し一層難有くなり病氣は日々に快くなり追ひく歩行して參詣し遂に長の老病も全く平癒しければ神德の尊きこと心魂に徹し益々信心手厚くなりしが此に不思儀なるは雪を頂きし白髪も黒髪と

變じ眼力も強くなり殘らず拔けて有りし齒も上下揃ひて生へ九十歳にいたり身もこゝろも若歸り難有く嬉しさの餘り赤木先生に願ひ廣大なる御蔭を蒙り病氣も全快せしのみならず御覽の通り頭の髮も黑くなり齒をも生ねさせ下されて全く若歸りたれは名を改め度存じます何とぞ宜き名を御授けつかはされと願ひければ先生早速筆を取り玉ひ十九女と認めて授け玉ひしと

二十九女をとく女と讀む二九十歳以上になりて伊勢太廟へ參拜せし時信者共よりあなたの御陰にあやかりたしと旅用の爲め若干の金子を餞別として送りしとぞ夫より太廟へ參拜し其の序に大元へ參詣して御禮を申し上げたりとぞ是ぜ手本となりて堺市近鄕に若がへりし人六人迄もありと中に七十歳余の婦人眼うすくして針仕事等は絶へて出來ざる者も若歸り針をつかふこと自在となりし嬉しさに御禮として絹の小切を色々と縫ひ合せ袋錢袋の立派なるを調製して神樂岡へ奉納し御神前の側に久しく掲げてありし由偖て右十九女の御蔭を受けし時赤木先生祝ひて『埋れ木も朽木もめで、葉も茂り若ふなります御代の春哉』と詠み玉ひければ十九女も『難有や日々に御蔭をいたゞきて今日ぞ嬉しき八十の花さく』とよみしとぞ實に尊き事なりすや

◎靈夢に依り難病全癒す

赤木忠春先生京都に布教せられたる時の事なりしか高位なる御方に身持惡しき人あり放蕩の末終に惡しき病に罹られ重症にて骨痛となんいへる不治の症と變じ數年の間病の床に伏し居られしが其妻君は至極貞操なる方にて

良人の不品行より斯かる病症に罹られしを露程も意に留ず病者の身体より
は濁々として膿血したゝり其臭氣言はん方なく他の人々は窃かに鼻を掩ふ
をも妻君は少しも厭ふ事なく晝夜の看病に衣帶も解かず最も懇に心を盡
して少しの暇あれば身を淨めて神明に向ひ早く良人の病を癒さしめ玉へと
一心に天照大御神に祈り奉り又神樂岡なる宗忠神社に祈念を凝らされける
が何分前々より放蕩の爲めに費せし大金と治療費等に入れ上げし負債は重
り來り今は藥代其の他日用品を需むるも思ふ儘ならず實に其困難いはん方
なく然れど少しも氣に留ざりし是れが通常の人なりせば此困苦に堪へ兼て
斯る際には薄情にも離縁を乞ひ生家へ逃げ歸る可きものなるに此妻君はこ
の憂目をば少しも厭ふ心なく益々看病と信心に全念なかりしが偖ても人情

の常として苦しみの餘り『誠より心を痛め身を痛め神に祈りを掛るかなしさ』
と口ずさみけり或日常の如く懇に病人を慰めながら痛所を撫てつゝありし
處病人は心持好くすやゝと寢入りたるにぞ其の身もいつとなく睡りしか
ど最も氣高き白髪の老翁忽然として顯はれ賜ひ汝の詠みたる歌を直し遣す
べしとて『誠より心も安し身も安し神に祈りを掛る樂しさ』と宣ひ夫れよ
り枕上に進み玉ひ病人に禁厭を授げられ直に立ち去り玉ひけるにぞ病人は
病床より起き揚り是れ御見送りせよと命じつゝ自分は玄關に趨り出づ妻君
も又其聲に應じて立ち出で夫婦とも同じく玄關へ立出しも更に見送るべき
人影とてはなく這は如何にも不思議と互に呆れ果てたる計なりしが風と心
付けば一場の夢なりし然れども正しく夫婦とも全時に同じ夢を見しとは不

思儀と云ふも餘りあり其の上に今迄起ち居も自由ならざりし大病人の俄に起きわかり床を出で、玄關の方へ歩みしなど實に奇なるかな驚き入るの外なし夫れより病人は引き起すが如く快方に赴きたりさしも難治と極まりし病も日ならずして全癒したりこは全く御神德なりと感泣し夫婦打連れて目出度神樂岡なる赤木先生の御席へ御禮拜として參詣なされたるが神床に畫師五峰の畫きし教祖神の御肖像の齋き奉りてありしを拜せしに豈計らんや曩の日病中に於て夢心に拜し奉りし氣高き老翁の御姿に違はざりしかば夫婦はアット一聲發せし儘ピタリと御神前に平伏し慄然として身の毛もよだつ計り勿体なしと涙にくれ暫くは顔も得あげず後漸く面を上げ恐る〳〵赤木先生に有りし次第を逐一物語り御神德の彌尊きを肝に銘し落涙留め得ず

感謝の御祓を献じて歸館なされしと云ふ

因に云ふ失に貞節を盡すは素より誠なり然れども誠にも生き死あり如何程善事を爲さんと思とも心が陰氣になりては死物なり斯道は心を傷めず何事も天に任せて日々を難有く嬉しく思ひて生きたる誠を勤むるが修行なり

◎赤痢病一時に全癒す

赤木忠春先生御在世中今を去ること三十八九年以前美作國久米郡鶴田村に太田多惣治といふ人あり兼て斯道の信者なるが或る時赤痢病に罹り追ひ〳〵々さし重り遂に家族一同へ傳染し長男一人は無事なれども他は皆全病にかゝり艱れ丸夫患となりけれは赤木先生を招待して御陰を受けたしと長男を

して赤木先生の許に遣せしに先生は生憎仝郡坪和村へ御越なされしとの事につき直に跡を追ふて馳せ行き委細の事柄を述べ御招待申し上げたしと願ひければ先生申さるゝに當家にも大病人ありて參りし事ゆゑ是を捨てゝ行く事も出來がたしと申されけるより多惣治の長男は力を落しシク〳〵と泣きながら先生樣御入り下されづならば父の命も是限りにて父子の別れも遠からずと思へばといひながら又も涙にくれけり先生は其狀を見玉ひて直に一通の書面を認められ封のまゝ之を持ちかへり御神前を能く掃除したる后開封して祭り病人へ戴せよと申されし故難有く頂き急き宅に歸りて父に其由を物語り御教に從ひ御神前を能く掃除し開封して御祭り恭しく拜せしにいとも尊き御文意にてわりければ多惣治は素より家族一同心魂に徹し一向難有く思ひ是迄の心を改めしや否や朝日に霜のきゆるが如く病者一同忽ち氣分爽かになり日ならずして全快し愈々御道の尊き難有きことを知り益々手厚き信者となりて人を助け救ひし事多かりしと云へり

◎生來不具のもの完全なる身となれり

京都神樂岡近傍吉田町おんぼう坂（今は神樂岡坂と改まりし由）備前屋おとみと云へる娘あり生れ付一方の足の裏甲にかゝり甲が裏の如くになり草履に跡掛をして少々づゝ歩行して居りしが母親は女髪結を營業せし故信者の婦人等が髪結に來り斯道の尊き噺しなどいたし聞せ尚佐伯先生の進めにて神樂岡宗忠神社へ參拜して赤木忠春先生に御禁厭を戴き段々御道の尊き次第を拜聽し小兒ながらに難有く思ひ一心に信心致し居りしが遂に御陰を受け並の足となる

りしは拾四歳の時なりしとぞ躾が少しもなかりしを或る時赤木先生の御論に感じ益々難有くなり更に御禁厭を戴きたれは常の人の如く躾も出來て全く並の足となりたれば本人は云ふに及ぶす両親の喜ひ一方ならざりし其后十五六歳の頃丹后國元伊勢皇太神宮へ赤木先生御參拜の時先生につき隨ひて參拜せしが道中何の障りも無くして無事に歸京し其后京都河原町石川氏の養女となりしとぞ

◎四高弟の中三高弟の概略を述ぶ

時尾先生は幼名事太郎と稱し後克太郎と云ひ忠道と名詮又宗道と改む兄弟三人ありて各學才ありて孰れも天下に名を擧げん事を計りけるに不幸にして兄弟二人は早く世を去り先生獨り學事に從事して漢學の私塾を開き多く

の門人を養生せり然るに教祖御高徳四方に聞きければ先生も學事に於ては敬て教祖に讓らざる考へにて或日教祖に拜謁して何か御揮毫を願ひなされしかば教祖則ち一書を認めて先生に賜ひけり其後先生上京し京都の有名なる書畫鑑定者に行きて試みに我が認めし詩歌を出し鑑定を請ふに是は能く出來て居ますとのみにて別に賞賛の言葉もなかりし次に教祖の御一書を出しければ鑑定家平身低頭再拜して云ふに此御書は凡人の書にあらず恐れながら菅公の右に出で玉ふ御高徳なりと賞賛尊敬せり其時先生眞に教祖の御高徳なる事を知り歸國の上神文を捧呈して信仰致されし由或る時教祖は先生に伊勢両宮へ代參を命せられければ先生命を畏り旅支度し御暇乞ひして御門前まで出で玉ふとき教祖御呼返しになり克太郎さん　大御神樣へ御目

にかゝりて御歸り下されと宣ふ先生は妙なる事を宣ふものかなと思ひつゝ出立し道中恙なく伊勢に着し先づ　內宮へ詣で神言を操返しつゝ數十回奉讀し終りて扨出立の際教祖は　大御神樣へ御目にかゝりて歸れと仰せられしゆゑ拜謁致し度と眼を開き窺へども御扉も開かず何も奏りし事なければ其日は宿に歸り又翌日も參拜して頻りに神言を奉讀して謹て御本殿を窺ひ奉れども別に變りたることなく終日拜しては又宿に歸り又其翌日參拜し例の如く神言を奉讀しつらく思ひ玉ふに是迄教祖の仰せられし事ならざることなく又違ひし事も更になかりし然るに今日まで三日の間も參拜し丹誠を抽て一心に伺ひ奉れども　大御神に御目にかゝる事の出來ざるは全く我が誠心の到らざる處かと益々丹誠を凝し祈念中フト浮みたる歌に「もろこしの山のあなたの小蜥しも耳がなければきこやうものに」さて是は自分詠せしものゝ或は古歌かは知らねど此歌の意によれば形を以て御目にかゝるには有らざる事を悟り夫より順次歸國なし教祖へ只今御代參致して歸りましたと申上たれば教祖は御頼み申しゝ通り　大御神樣へ御目にかゝり下されしかと宜ふ時尾先生は謹て參拜中の始末を申し上げ尙右の歌のこと迄を具に復命なされければ教祖默然として天心號を授け賜ひ夫より愈々道味を悟り神德靈驗著しく斯道四高弟の一人として德澤四方に聞ゆしとぞ

※　※　※　※　※　※

石尾先生は乾介と稱し號は天丁有則と名詮り岡山藩士にして漢學者の名高く文武とも衆に秀でし人なり教祖の敎を聞き道の妙味を悟り玉ひて信心堅

固なり毎月二七の會日を一會も忌たらず參拜し能く道を守り玉ふ或時天城
藩田家の太夫池田某の家臣教祖の御事を主人公に申上げれば一々聞取られ
石尾乾助は豫て信仰せる由なるが仝人如何申さるゝやと尋問ありたれば家
臣の答へに石尾氏は數ケ年前よりの信仰にて講釋日には一會も欠げなく參
拜あり云々と述ぶ然らば別に取糺すに及ぐず正しき道に相違なしとて右太
夫の家に教祖を招待して講釋を聽聞致されしに其釋き玉ふことゞくに感佩
ありて信仰厚く致されしよし又或時教祖石尾先生の宅にて月代を剃り髪を
結玉ふて銅盥の水を石尾氏の下婢に捨て下されと申し付けられける其後其
下婢（此下婢の髪は縮みて櫛も通らぬ樣なる生質也）の髪衆に勝れてすなはに能く伸びたるを先生
見玉ひて其許は縮みたりし髪が如何して俄に美はしく伸びたるやと問ひ玉

ひければ下婢の答へに是は先日中野の黒住大先生御月代を剃り玉ひし跡の
水を捨よと仰せられし時尊き神樣の御遣ひ遊ばされし殘りの水ゆゑ流して
は勿躰なく思ひ器に入れ置き折々髪に付けたれば常に氣にかゝりし縮み髪
悉く伸てケ樣にすなはになりまして誠に嬉しく難有ふ存じまするると申し上
げふれば乾介先生はハタと手を打ち玉ひて難有し〳〵其許は教祖の御德を
我より能く知りたりと厚く賞賛せられ一層御信仰になりしとかや石尾先生
は布教者と申すにあらず道德家と稱すべき人なり御道研究に付ては色々尊
とき事多しと雖とも爰に其百分一を掲げて四高弟の一たる事を記しぬ

〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃

河上市之亟先生は岡山藩士にして博學の士なり壯年の頃村方の役を勤め玉

ふ時村内の數或る年（戊の凶年の春ならん）ヅヂゴと申して笹の葉に麥粒の如き實のり葉は素より竹までも枯れて衆人苦めり先生は何卒此數の枯るゝ竹の病を治す法もあらばやと種々心を勞し玉ふとき敎祖に御面會ありて竹の病の治る樣の事はムなくやケ樣に竹枯れては下々の者も困ります又御上の御用あらし時は大に差支甚だ心配致す事と申し上られたれば敎祖は然らば此邊の數を御禁厭を致し置きますと仰せられ御禁厭をなし置かれけるに其數の竹の病ひ悉く治りて青蒼したりければ先生を始め近村の者ども大に感じける其後年月を經て先生の母君大病に罹り玉ひ藥石の効もなく九死と申す場合に至り兼て孝心篤き先生の事ゆゑ晝夜の別なく能く仕へ看護に怠りなく母君に何か御心に望み玉ふことはムりませぬやと問い玉へば別に望みは無

いが中野の黒住先生を御招請して御講釋を聞き御まじなひを受なば此上もなき事なりと申されしかば先生早速畏みなされ黒住先生は私が申す時には直に御出で下さるゝと黒住の御宅に參り敎祖へ御面會ありて私宅へ御入來下されたしと申し述べらる敎祖宣ふに私しは貴所方の如き學者先生の御耳に入るやうなる事は申し上げ兼るに付（或人の咄に河上先生は博學なり殊に侍にて其當時は權威高く敎祖は稱宜職敢て學者にもあらず聘して講釋を聞く程の事はなけれども母君の望みゆゑ餘儀なく參られしと申候ことなり）平に御斷り申と仰せらる（其時先生の心中に是は凡人にあらず聖人も人の肺肝を見るが如しと予が心中を知り玉ふならん折角招請しても參られざれば母君の思召と云又宣職の人を侍が態々迎に參りて其道）先生言葉を改めて私達せずては仲間中も面目なしと彼是思ひ回らしつゝ）が御講釋を聞くではムらぬ病氣中の母が達て懇望に付き態々參りたる次第なり今日御入り下されずては母落膽し衰弱の身なれば命にかゝる樣のこ

と無きにしもあらず左樣なりては予が命も此儘にて居られざる次第なりと申し述べ先年竹の病ひ直りしこと等も思ひ出され是非とも母の望み通りに致したくと孝心の餘りに不斗落涙して重ねて御入りを願はれたる其赤誠滿面に顯はれたり其精神敎祖の御心に貫徹したるや然らば參りましようが今日は參りがたきに付明日の事に致します尙參るは參りまするが貴所の只今の御誠心なれば參るにも及ばぬ位の事にて厶る御歸りなされて御覽母君は早や御蔭を御戴きになつて居られますとの事にて止むなく先生は暇乞して宅に歸りて見玉へば敎祖の仰の如く病氣頓に治して勇ましくなり居りたれば先生も大に感激し以后は益々信仰厚く遂に敎書を著述し後生を提撕し玉ひし其功蹟の著しき事は衆人の知る所なり玆に四高弟の一たる概略をしるしぬ

◎說敎に感服し病癒一家睦じくなる

美作國松岡清見先生は斯道の高弟なりしが前年江州大津の本敎說敎所に在勤中此の大津の里に貧しき暮しを爲せし末廣吉助と云ふ人あり當時雲助体の稼をなし兩親夫婦四人暮しにてありしが兼て吉助は雲助の事なれば上り下りの旅人の荷物を運び西へ東へとする內にいつしか梅毒を受けたれども其身は左程惱みもなく常の如く稼ぎしが妻のお直に傳染して三箇年の久しき間病の床に臥したる中お直の面部は處々に凹み出來最も見苦しくなりしかば吉助は愛想をつかし已の仕業を顧みず病み臥す女房を無慘に取扱ひ介抱だにもせざるのみか折にふれては打ち毆き抔して汝の樣な奴は盜るか溺

るいかして早く死ねがしと云へば姑も其尾に付さコレ嫁女頑ふにも程がある三年越の長病氣生きもせず死にもせずゴクドウ梅毒今息子の云ふ通りに早く死ぬるが上分別若し又死ぬるが嫌ひなれば里方へなりと歸へるがよいと不義理無情の姑が言葉にお直は枕を擡げ眼に角を立て是れ母上どの妾が此の病氣に懼りしは誰れからしや夫吉さんの日頃の放蕩ゆゑの此の病氣それを言はず死ねの歸れなど勝手自儘も程がある妾に於ても隨分歸りもするけれども嫁入して來た其時の無疵の身体に直して貰ひました其上は何時でも歸りても遣る抔と聞かれぬ荒言葉明け暮れ喧嘩の絶え間とてはなかりしが或る時お直は知己の人の勸にて本教説教所へ參拜して御禁厭を願ひしに丁度其際松岡先生の説教中にて其説教に人の心と申す者は如何樣にでもなるものなり死となり生となり又は富を招き貧を來し或は神ともなり鬼ともなるナント皆さん死生貧富は勿論たが鬼にでも神にでも唯我が一心の用ゐ樣にてなるものなれば一心の赴く處を慎まねばなりませぬと最も勇ましく説かれければ拜參の人人は拍手低頭せり中にお直は取分け心魂に徹し聽聞なし居たるが説教畢りて禁厭を授かり宅に歸りてよりは常に異なり容貌を改め言葉を正し夫吉助の前に両手をつかえ涙ながらに誠に々々是迄は大に心得違ひにて大切な良人に對し云ふに言はれぬ惡口雜言又お年の寄りたる御両親樣にも御心配をかけし罪何卒御免しくだされと偏に詫び入る女房の言葉に夫吉助も又一間に留まる居たる両親も感じ入り一言の言葉もなかりし吉助は稍々ありて言葉を改め日頃に似合ぬ汝の言葉何故左程ま

で改心なしたるやと尋ねたりしに女房お直は尚も膝を進め御不審は御道理實は今日黒住の説教所にて御禁厭を受けんものと思ひ參拜しけるに折しも説教中にて其説教に人は心の置き處にて苦樂貧富は云ふ迄もなく病も直り恐れ多くも神樣と御一体になるゝとの御論しをば聽聞しわら恐ろしや私の心今日は河へ入ろうか明日は軒端で縊ろうかおのれ死すれば此の家の惡魔とならんと種々死ぬる工夫をして居りましたが今となりては勿躰ない所夫が私に此病を傳染して下されたればこそ説教所へ參拜し御蔭にて難有や心の曇りが打ち晴で遠山の端に出でさせ玉ふ朝日に向ふが如く勇ましく清き心になりしと云ふものは皆御前樣の御蔭かと思へば病は苦にならず却の病が難有しと語る話を聞きし夫吉助を初め両親共に大に感じ入り孰れも心を改めて最とも睦まじくなりしかど道の歌にもある通り「心だに誠の道にかへりなば病も治る家も榮ゆる」とお直の病も日を追て全快したりしが家内は猶々睦まじく家内一致に稼ぐより昔の貧は何處へやら家は自然と富み榮え何不足なく暮す中善事の聞えいつしか此事其地の奉行の耳へ達し深く感賞の餘り褒美までも賜はりしとかや

◎説教を聞き改心して我が子の盲目開眼す

明治七年四月備前國赤坂郡（今ハ赤磐郡となる）牟佐村の内字大久保と云ふ處へ武田春吉と云へる斯道の先生を招待して説教を願し處同村黒田初五郎なるもの悴又七（九歳）の盲人を連れて參り説教を聽聞し居たるがいつしか御道の難有き事心に徹し涙を流しつゝ跡に殘り呪を乞ひ且ついふ樣有難き御論を受

誠に感じ入りました尚此上も御陰を蒙り度故明夕は私宅へ御招待申度と懇に請て歸れり而して初五郎は翌朝早く來りて申すには私は若年の比よりの兇者にて家業は高賴船の船動にて北は作州より南は讃州まで行かぬ處なく行先ごとにて博奕は勿論喧嘩口論口賊などわらゆる惡事せぬと云ふ事なきゆゑ人々我を藥鑵初（頭の髮はげて藥鑵の如くなりしゆゑなり）と綽號して其恐るゝ事毒虫の如く厄病神の如く忌み嫌はれしを只獨强きものと自慢せし其仕業今考ふれば言語同斷遂に兇者となり果しは何とも恐入たる次第にて人の噂にもあの子の盲目は親の業なりと嘲りを受るを聞て無念やる方なく人の謗を受んよりは此子と共に淵に身を投げ死んとまでに憂ひ悶へしが人の勸めにより夜前始て御講釋を聞きしに人の云ふ如く實に私は天の罪人にて我子の盲は我がなせしと云ふ事能く合點參り後悔の外これなく此上は只管に神樣に御託を願ひ奉りますと折り入て泣く〳〵賴みける其夜の席も親子共に恭しく說敎を謹聞なし難有く寢床に就きしが翌曉におよびて又七は眠を覺し爺さん内の家は新しいなう天井が奇麗な（去年作事せしは子の盲後の事也）と云ふを聞て初五郎飛起き眼が見ゆるかと問へはハイ見える樣になりましたと答へけれゞあら難有や眼が明しかや御蔭を受けたかと親子を始め家内中相喜び相泣さて感涙に咽びあへり間もなく夜も明けれゞ遠き處までもほのかに見ゆるやうになり失れより日を追ふて全く開眼せり因て初五郎も彌改心し善良の人となりて手厚き信者となりぬ又船動職も大切に勸め行く所々にても打替て叮嚀を盡せしかば人々其改心に感じ是迄毒虫と嫌ひ厄神と恐れしものが朋友の如く

睦じく交る樣になれりとぞ彼惡に强き者は善にも强しとは初五郎の謂乎嗚呼神明の人心を賞罰し王ふ明かなる哉誹謗の惡を懲せる又益あるかな

◎有り難さ心になりて眼を開く

教祖神の在世中岡山市に老婆眼病を煩ひ種々治療すと雖ども功驗なく遂に盲目となりければ或人より上中野の黑住先生の御禁厭を戴きて盲目も晴眼せし者多しれまへも參りて御薩を受けられては如何やとの勸めにより或日手牽を連れ漸く大元へ參り御呪を戴き夫れより一ヶ年間日々參詣致したれども更に驗しなく老婆は熟々思ふて是迄參詣しても御薩なきゆゑ迚も我眼は見ぬものと諦め或日教祖に向ひ先生樣私は昨年より丸一ヶ年參詣致せども更に御薩も無く人々の咄しを聞けば何某は一度の御禁厭で晴眼し誰の病氣は一週間で治り又は二三ヶ月を經て全快せし抔と承るに私は一ヶ年を經ても更に御薩を受けませんケ樣に御薩を受けぬものが長く參りまして、はおなたの御顏にも掛りますゆゑ今日限りにて參りませんと申上たれば教祖宣ふにおまへが治らねとて決して私の顏にも何にもかゝはる事はござらぬ予は人を目的に勸る道ではなく神樣を目途に勸る道である故其邊の御心配には及ぶぬが併しおまへは何も御薩を戴きなされぬか能く考へて見なされ惡々御諭しに成りたり老婆は御暇乞して歸宅致し其夜寢ながら思ふに先生樣が何も御薩は受けぬか能く考へて見よと仰せられしが昨年初めて大元へ參る迄は逆上して頭痛を發し夜も寢られぬ程のことあり又肩が凝りて氣分が痛み或は陰氣に成る日も度々ありて時には色々の愚智を出しいつそ

死のふかとも思ひし事もあり又始めて大元へ參りし時には手を牽かれ途中三四度も休みて漸く參りしにいつとなく頭痛も治り肩も凝らず氣も強く成り眠こと見るね休は丈夫に成り今は手牽きも入らぬ途中に休みもせず實に難有御蔭を十分に戴きて居る事には氣が付かず只管眼の見ぬ事計りに心を寄せ今日は先生へ失禮の事を申上げ相濟ぬ事を致したさて〳〵思へばおもふ程難有い事であると眞實有がたく成り難有い〳〵と思ひつゝ寢入翌朝起きて臺所に行き盥に水を汲み顏を洗ふ姿を嫁が見て母上おなたはいつも手水を取りて上げますに今朝は如何なされしぞと云ふ聲に嫁の方に振り向けば久敷ぶりに嫁の顏が見るたりあら難有やわたしは眼が見ゑだしたおまへの顏が能く分りますといへば嫁も歡び家内打寄り皆々御神德の尊き事を

感じ昨日教祖へ申上し事又教祖より被仰聞しと等を咄し一同難有さに隣家の人々へも吹聽し夫より直ちに大元へ參り御禮拜を致し教祖へ厚く御禮を述べ失禮なる事を申上し段を謝したれば教祖は莞爾と笑を含み給ひ夫れは有がとゝござるどうぞ信心を致し誠を取外し成さらぬ樣と宣ひしとぞ

因曰總て世の人々難を受けて其難の事のみに苦みて心が陰氣になり其陰氣なる心を以て神佛に祈るゆゑ靈驗の薄きは道理也斯道は形の難を心の難とせず心は日の神の御分心にして限りなきものなれば心に神のまします事を覺り形に付て起る陰氣を去りて御陽氣を十分に戴き陽氣になりて說教を聞き禁厭を戴きなば靈驗も著しく顯るゝなり此老婆も眼の事のみに氣を寄せ身体の壯健に成りし事等には氣が付かざる處よ

り先へ〳〵と氣が走り居たるを心を鎭し前後を顧み始めて眞の難有い事を知り一夜の間に御蔭を受けしものならん實に尊き事ならずや

◎迷夢覺めて宿痾全癒す

備前國舊御野郡奥内村神職に杉村外記と云へる人あり幣頭にて神職の頭役なり格式高く鎗を立て長捧の籠に乘り權威も亦高く殊に學者にて私塾を開き門人多く盛なるものなり此外記氏病に罹り種々治療すと雖とも宿痾となり常に服藥致せとも治せず折々差起りて難澁す故に門弟中より勸むるには近來上中野黒住は天津神の御德を受け世の病者に禁厭を施し其靈驗著しく東西南北より續々參り神德を蒙る者多く至て盛なり先生も黒住の御禁厭を御受けなされなば御全快あるべしと申し、所杉村氏は嘲り笑ひ左京が祈禱とか禁厭とかすれども我等にはき、申さずあれは田舍の何も知らぬ者共か賴むので取るにたらぬ事じやと更に承諾せず門人共も先生の事故强て申ても如何と夫れ限りに默止せり然るに外記氏の病は尙差起りありて藥も更に功なし長々の煩ひよ困難の余り門人に向ひ先達て予か病を黒住左京に呪ひ貰へと云ひしか今日は左京か所へ行て見うかと例の長捧の乘物にて大元へ參りしに幸ひ教祖の御講釋中にて外記氏は坐に着かれ其御講釋の一言ごとに外記氏の肺肝を刺すか如くに難有く思ひはからす頭を垂れ後には疊に頭を付け一心になりて聞けば聞く程難有く感佩し苦痛も忘れ講釋の濟し時には忙然として夢の覺めたる如く心すがゞしく更に身に苦痛なし教祖外記氏に御禁厭をと申されしかは恐れ入りて御呪を受け益々氣分爽かになり

しかは外記氏の喜ひ一方ならず是れ迄形に目か付き今村宮の祠宜職とあなどりしは大に心得違ひにて實は見下して居りまして何とも恐れ入りたりと厚く御詫を申上げ即座に狂歌をよみて教祖へ差出されたるは

學問はたゝ人眞似の猿しばゐ

おしゆん(傳兵衛)わけはわからじ

かくよみ暇乞して宅に歸り其后日々壯健になり遂に神文を捧呈し手厚き信者となり二七の御會日は懈怠なく參拜し九十歳余の齢を保ち三代宗篤殿の御幼年の時迄も御會日毎ゝ參拜して神職中の龜鑑ともなりたるよし

◎御一言を守りて病氣全快す

教祖御在世中備前國に尾形長次郎と申す人あり此人或時難病に罹り種々療方を施すと雖ども癒ゆるより教祖へ癒ゆべき道を問ひけれゞ汝は病氣に負て居るそへと唯御一言仰せられたり長次郎は恐れ入り其儘退ひてツラ〳〵考へ見るに成程是まで數年病氣に負て居たり病氣に勝ずしては癒ゆべきものにあらずと始めて氣が付き夫より心を取り直せし處いつとなく平癒したるよし今は無病健固なるのみならず善き先生となれりと

因に曰く教祖の御高德ゆゑに唯一言にて病を癒したるなれども總て高弟方は御一言を拜聽して其まゝ其言を確守せらるゝも又目出度ことになん今時の人は度々承りても其言を用ひざるものまゝあり愼しむべき事ぞと思ふ

◎一言を聞て悟りを開く

香川縣讃岐國塩飽島に大工職香川藤吉といふ者あり（大元棟梁香川金四郎か父也）曾て所用ありて上京致しける途中にて尾州の旅僧と同道す如何なる話の序よりか僧のいへるに斯く諸國編歴致すといへども今時は何國にも高徳の出家がなき故に我々が修業も徳に登る事叶ひかたく空しく歸國に赴き侍るといふ藤吉是を聞きていふ樣其御志は結構なれども憚りながら御心入れか違ふゆゑ御違し遊ばしかたかるべしといへば僧色を更て御違はいかなる事にて拙僧か心入を違おとはいはるゝやといふに藤吉いふ樣さればなり私は備前國の者なるか私國に黒住樣と申す生神樣おりて毎々其講釋を聞けるに修業の上にて神になるにあらず生れながら其身其儘神といふ事を承知致し神たる者は不義不淨の行ひを致すべからずとの御教なり爰を以て御僧のいはるゝ今時は何國にも高徳の出家がなき故御身の御修行徳に御上り成されかたしとの御事是が御心入が違ふかと申しふなり御僧も生れながら其身其儘の佛と御思案に一決あらば直に尊き御佛なりされば他人の高徳を待ち給ふに及はず是迄凡俗と思召だる穢なき御予簡を捨られて自ら佛となりて不義不淨の行ひを致さぬように行ひ修め給はゝやかて衆を離れ玉ふべしと云ひけれは旅僧大に感悟しけるとなり

因に曰是等は唯豈人の病の治りしなどの御蔭に非ず其功徳大なりと云ふべし

◎神縁に因て脱疽病全癒の御蔭を受く

明治十年六月下旬の事なるゝ西京より御禮拜として大教曾所へ參詣せし最

上光密といふ人は比叡山西塔北谷金臺寺の住職なり明治八年三月石に跌つき足の指を傷めしが病根にて遂に脱疽の症となり療薬手を盡すと雖ども其詮なく右足の指三本まで腐て墮ち痛みいよ〳〵甚しくなりけるゆゑ西京三條大橋の旅宿に出て療治せしが同年十二月六日寢語に子の年子の月子の日御誕生の神あり此神に願はざれば此病の治することは有らずと再三言ひたり覺て後看病人より此事を聞たれども據處なき寢語と思ひ居たりしか不圖宿替を勤むるものありて三條木屋町三十七番地へ同月九日に轉じたり此時更に看病人を雇ひたるに斯道の信者にて頻りに信心を勸め看病人代參となり翌十日より十六日まで神樂岡宗忠神社へ日參をなしたるに兼ての苦痛大に甘ぎ何となく難有き心地になりたり十六日には駕籠にて神樂岡へ參拜したる處此日恰も冬至祭にて說教ありし夾なり其說教に教祖宗忠神は子の年子の月子の日冬至一陽來復の辰を以て御誕生なりたり云々と申さるゝを聞き思はず低頭平身し過日の寢語に符合せるゆゑ信仰益々深くなり一度の禁厭にて苦痛を忘れいよ〳〵神德の難有き事心魂に徹し形の事を忘れ只難有き一心になりて只管心を活して居たりしに先きに腐て落たる指の株頻りに動く樣に思はれしか三日目の朝には指の株より肉をまき爪まで生じたり其夜より腫の痛み居たるも一先腐り落て一夜の內に元の如く癒たり依て神德の有りかたさと益々心魂に徹しいつゝ還俗して神明に事へ神恩に報ひ奉らんと決心したりしか追々全快するに及んでその志少し撓みけるに忽ち又左の足痛を發し翌年七月に至て又左の足の指腐りて墮たりけれは大

に悔悟し行水潔斎して神樂岡宗忠神社へ夜籠りし三日の間精神をこらして祈願せしに忽ち左足の指悉く肉を生じ追々本復せり夫より二三町はかりの歩行はかなひしか其際大教會所へ參詣するに岡山市より大元まで三十町計りの路程なるに歩行自由自在なること諸人と少しも異ることなく終に全快す誠に難有き御蔭を蒙りし事にぞありける

因に云病氣の治るか斯道の本意にはあらざれども身躰健康ならざれは君父に忠孝を盡すことも家業を勤むることも出來ぬものゆゑ形の壯健なる程目出たく且つ嬉しき事はあらず然るを人力の及はざる難病か神德に依りて全快したる其嬉しき難有き事も日月を經るに隨ひて次第々々にうすくなり遂に廣大なる御蔭を取外すことの多きものなれは無病壯健なるときには病氣にて難儀せし時のことを思ひ出して常々神恩を忘れざるが信心のはじめなりと知るべし

◎大難を逃れて蘇生す

中講義水原彌太郎氏は壯年の時より本教を信仰し手厚き人なり御一新以來大坂市に開業し所々の教會所に在勤して專ら布教擴張に盡力せり其間虎列刺病に罹りたる事もあり其他種々の災難を受けしも悉く御神德を戴きて其難を免れたり就中明治十六年四月十三日夕或る家の御席に參り夜更けて同市北區堂島中一丁目小教會所に歸らんとて筑前橋北詰舊筑前侯の藏屋敷前迄歸りし時突然大きなる男三人出て待てと云ふ何用なるかと尋ぬれば外の用はあらず貴樣が衣類所持品を貸し呉れと云ふより彼是言ひあひし内一人

は片付けて仕舞へと云ふ斯く云ふうち着物を剝ぎ懷中を掠め奪ひ刀を拔て大げさに切られたる樣夢の如く思ひ其後の事は一向覺えず（堂島小教會所は路次門ありて凡二十間計り奥にて夜は十時頃門を閉す故這入られす）然るに教會所詰員は能く寢入りて居りしが何か物音せしに一同眼を覺し戸を明けて見れど果にて水原氏倒れ居れり詰員の驚き一方ならず事の如何は知らざれどもコハ大變なりと禁厭を施すあり御神水を吹掛る者もあり種々介抱せしが漸くにして蘇生しけるより内に入れ其次第を問ひしに水原氏は前の次第を具に述べ何分大げさに切られたと思ひしが何故此處へ歸りしや一向合点參らすと物語りせり依て脊中を見れは肩より脊に赤き色付き竹の鞭を以て毆打したる如き跡あり是は全く教祖神身代りに立せ玉ひしならんと

一同御神德の尊きに感じ倶々御神前に向ひ奉り神言を唱へ厚く禮拜して雞鳴の頃眠につきたり習朝下男門戸をあけ掃除を致しけるに玄關の松の枝に着物かゝり居りコハ不思儀なりと下し調べ見れば則ち水原氏の品にてありけり肌守懷中（懷中に金拾五圓計り入れ置きしに其まゝにてありしと）帶着物羽織袴襦袢等一切有しとは實に不思儀とや云はん夫れに此家は家込の地にて往來より廿間も隔りを如何しても玄關に投込むことの出來ざりしに右物品の戻りしと又水原氏の此處まで無事に歸り居たりしとは人の力の及ばざる處なり一同益々驚き猶能く着物を改め見れは襦袢の肩より脊にかけ切れ居れり察するに襦袢一枚にして切り付けしものならん更に御守を袋より出し見れバ兼て水原氏御守に膏藥を入れ（不淨除のつもりにて）置し其膏藥二ッに切れ居る故尙更御神德の

尊さ心魂に徹し身の毛もよだつばかりなり其難有さ何に例へん樣も無く水原氏は素より一同涙にくれつゝ厚く御禮拜をなせしとぞ委きは水原氏へ直接御尋問（目下兵庫にて在勤中）あれ右二つに切れし榊葉も大切に保存し居らるゝと云ふ

◎神札を携帶して戰場の難を逃れ又戰功あり

伊豫國新居郡西條町字本町近藤芳太郎氏の甥ゑ仝郡金子村矢野益太と云へる人あり此人去る明治廿七八年の日清戰役ゑ後備兵ゑて召集され愈々出戰を命ぜられしより暇乞の爲めゑ芳太郎宅へ參りけれは同人申ゑは軍ゑ出るからゑは必す一命を惜むなかれ死して歸らぬ氣で往くべし餞別として是れを贈るとて敎祖神の神詠と外ゑ一首の歌を詠せり

（神詠）身も我も心も捨て天地の
たつた一ッの誠ぞかりゑ
我が爲はおもひ離れて君が爲め
つくすてゝろぞ人のまゝゝろ

（芳太郎の詠）

此歌を心得て我をはなれ身を思はす相勤へし云々と懇ゑ申聞せ其后芳太郎は毎夕軒燈籠を燈し海陸軍の軍人健康戰ゑ勝利を得さしめ玉へと朝夕怠らす大御神敎祖神へ專ら祈念せり然るゑ益太は戰地ゑ於て毎日鐵砲を肩ゑ荷ひしか肩いたくなりしゑより手拭を八ッゑ折りて服の下より肩ゑわて居りしゑ或日の戰ゑ肩より左の腹へ玉抜け通り一旦倒れたれども別ゑ異狀なく息も出來る處より起て大ゑ働きたり又或日右の足のトリコの節より玉打

扶かれたれども血も出せず尚進んで大よ戰ひ両度迄玉よ當りたれとも身体よは更よ疵なく余りの不思議さに御守を出し見れは恐れ多くも宗忠神社の御守に二ヶ所の穴ありける故愈御神德の尊きを知皇恩を敬まひけり後戰功により功七級勳七等に叙せられ年金百圓を賜り目出度歸郷せり右玉の當りし服には二ヶ所手拭は八ッ折なりしを以て八ヶ所靴并に靴下にも打扱し玉の穴あり此の如き事は人智を以て計り知る事能はず第一靴などは足に添ふて少しの透間もなき者なるに靴と靴下とに穴ありて夫れに足を貫かざる筈なし實に不思儀なるかな又伯耆國渡村の離波万吉と云ふ人は徴兵適齡に(入營前は法華宗の坊主にてありしと)抜擇され入營して後豫備軍と成り居りしが日清の役招集に應じ派遣され此時隊長より何々神社の御守なりとて渡されしも神の

尊き事は少しも知らざるよりケ様のものよりか暖き飯の一膳なりとも呉れば宜にと小言を云ひつゝポケットに入置けり又宗忠神社の御守なりとて渡されれば面倒なと云ひつゝ又もポケットに入れ置きたり或日極早朝清國の斥候兵六七名に相過せり其朝は何となく心地悪き處より御守へ手を宛て進みしかは黎畑より敵は銃砲を發したり万吉は倒れたれども別に負傷なきより直に起き上り專ら防戰し後にて我身体を見れは服の乳の所へ玉穴ありて脊に貫き居りしかは不審に思ひ不圖氣が付き御守を取り出し見れはアラ不思議や難有や宗忠の忠と云ふ文字に穴ありけり是全く御神助なりと思ひ始めて神國の尊き事を知れり其後も毎々御神助と思ふ事ありて増々信心の念を起し忠勇奮戰し遂に勳八等に叙せられ年金をも賜りしと歸國後は黒住

教に神文を捧呈し專ら信仰せりと

右の如き靈驗は枚擧に遑あらず故に宗忠神社の御守は鐵砲除と申して御一新前より武人の信仰甚多し既に出雲國松江中教會所部下信徒等の子弟は日清の役に出陣したる者四百廿二名の多きに及ひしと雖ども其内壹人死せしのみにて其他は悉く壯健にて歸國し金鵄勳章或は勳等年金一時金等を頂戴したる人も多く有りしよし實に尊き事ならずや神詠にも

身も我もこゝろもすてゝ天地の
たつたひとつの誠ばかりに
火の中もつるぎの上もいとふまじ
きみかなさけのまことゆゑには

已に克て神と一体

かくなれは今より後は天地の
中は我がすむうちとなりなん

如此心得にて出陣すれは必す戰功あるものと疑はす信仰ありたき事なり

◎外人神德の尊きを始めて知る

大阪市島の内小教會所部内信徒兼松正太郎氏米國へ航海の時尙米國にて著しき靈驗の顯れし書面を得たれは左に記す

明治廿二年九月廿七日午前三時神戸を出帆す十月八日午前二時頃より大雨降り來り暴風浪を起し其音百雷の如く船は木の葉の浮へるごとく動搖する事甚しく船長は水夫を指揮して直ちに帆を降さんとすれとも意の如くな

らず止む事を得ず中央の檣を切斷して海中に投せり然れとも波は益々高く船の甲板上を右より左に越して船上は恰も大海の如く船は傾きて將に轉覆せんとし器物は皆船内にて右往左往に散り亂れ歩む事は素より匍匐する事もならず水夫等は身を繩にて結び以て働きけり此時人命の力とも頼むへき水槽は轉倒し二等運轉手「グランド氏」は檣の中央より甲板上に落ちて右肩の骨は上部へ突出せり此大風連續する事八日間水夫等も負傷せざるもの一人もなし余は此大風の間船内に在て負傷者の看病をなし居たりしに「グランド」氏は余に向ひて能き藥を持たすやと問へり小生は此時折骨の藥は用意し居らざれども萬病を療するは最も易き事なり我國固有の神道あり神に禱れは病癒ゆすと云ふ事あるべからすと云ひしに同氏は素より神明の何たるを知らされは只默然として云ふ事なし此夜小生は我室内より心を込めて神を招き意靜かにして御陽氣を充し「グランド」氏の室に向ひて吹く事三回遙かに禁厭を施したり翌朝同氏の室に行き病を問ひしに氣分大きに宜しと答ふ余は其後神德なる事を知り我神道の大意を説き不斗本年の初村上重兵衛氏が癩痳の神德を受けし事を思ひ出し其靈驗を語りしに不思儀にも同氏は禁厭を受くる氣になりたり故に余は口を洗ひ禁厭を授けんとせしに「グランド」氏は余の教ゆる通り二回拍手して禁厭を受けたり而して自ら笑て曰く僕は今手を打ちたり見玉へかし此通り拍手する事を得たりと手を打つこと幾回大に喜へり小生曰く是れ即ち神德なり大方腕も動くへしと同氏は腕を上げたるに又た上りたり即ちシャツを脱き見るに如何なしたるや突

出したる肩骨は引込みて既に平癒したり前後より翌朝に至り何時の間に御
蔭を受けたるものなるを知らざれども實に恐れ入りたる有り難き事なり此
時より「グランド」氏は小生と共に深き朋友とはなれり不日神文捧呈するの
約束をなしたり

米國ポートタウンセンド港

コスモポリタン宿（宿屋の名）

明治二十二年十一月二日　　兼松正太郎

※※※※※※※※※※※※※

本年（明治二拾三年ノ十）一月十日頃小生「ポードアンシレス」に於て當鐵道會社の書
記「フィッツヘンリー」氏と一里余の山中へ遊獵に出候元來此ポードアンシ

レスと申す所は東に海を扣へ西に山脈を帶び山海共に獸鳥魚に富みたるを
以て日曜毎に或は舟に乘り又は銃を肩にして遊歩するもの多く且遊歩のみ
ならず獵師漁夫も多分有之常に山中には銃聲の斷へ間も無之候小生の旅宿
を出立せしは午前七時頃にして九時過には山奥に達し處々尋ぬれども獲物
無之に付山中にて行厨を開き十二時過ぐる頃歸路に就き候歩む事十數町に
して一ッの溪川に來り候處一本の丸木橋あるに付き小生は先きとなりフィ
ッツ氏は後となり渡りしに小生岸に片足を掛け將に渡り終らんとする時忽
ち一聲ズドンと響きし銃聲と共に小生の高帽子は遥か後ろに打ち落されて
谷川に入りたり後なるフィッツ氏は丸木橋の中央にありしがアッと一聲呼
ぶや否や仰向に谷川の中に落ち込みたり小生は大に驚き大聲にてフィッツ

よ如何なせしやと呼へり彼は谷川の下より嗚呼余は今將に死せんとす銃丸は正しく余を撃ちたり君早く余の爲に讎を報せよと云へり小生は事の爲すべきを知らず萬一同人を死せしめば如何なる疑ひを受けんも計られず且其銃砲は音のみ聞えたれども流丸の事なれば撃ち人の何處に在るやを知るべからず爰に一心を込めて　敎祖神を呼び參らせ願くば市中の旅宿に歸る迄は彼れの生命を全からしめ給へと念じ直に走つて同人を助けんと欲すれども如何せん谷の深さは七八間もあれば遠する事甚だ難し漸く廻り道をなして馳せ行き同人の容貌を見るに滿面血に染みて何れが目何れが耳なる事を知るべからず猶流れ出づる血は点々流水を紅となし見るも中々身の毛も逆立る有樣なり小生は大聲を發して其名を呼び起す事三四回にして同人は

本性に返り只苦痛に叫ぶのみなり小生動く心を漸くに靜め豫て我躰を離さず持參せし　敎祖宗忠神社上棟式祭典の洗米を出して曰く君は決して死せざるべし今此一粒を飲み下だせ是れ余が日本にて不死生通丸と申す靈藥也神明の吾等を救はんとて始めて賜ひしもの也猶委しき事は後に述ぶべきにつき必ず疑ふ事勿れとて同人の口中に入れたり

夫れより流水にてハシケチを濕し同人の顏を洗ひ見るに額の正面長さ凡二寸深さ三四分小生の中指を横に入るゝ程の傷にて骨相見へ皮肉は丸と共に行方知れず猶長さ一寸餘巾五分程の傷右の耳の前毛の生ゑ際に有之候處是れ同樣皮毛肉は丸と共に行方知れず候因て小生は猶傷口を洗ひ御洗米の包紙を清水に染せしめ心中に彼の五十鈴川の神歌を唱へ（寺川先生よりの傳授にて小生への御

錢別なりし）清淨の心を以て同人の傷所に貼ハンケチ以て鉢巻をなさしめしも同人は眼暗みて歩行する事能はず依て小生の肩に掛らしめ右手に同人の腰を抱き左手に獵銃を携へて山を下り直に馬車にて宿屋に歸りしに同人は氣分大いに宜しく其夜醫師來りて診察せしも既に肉に卷き來り薄き皮出來たり痛も既に去りし如くなり依て醫士は處方書を殘して去りたり其翌日小生は師匠よりの書面を受け取りし處「ポートアンジレス」より當地に來り居申處其後「フィッツ、ンリー氏」來り小生を大學寄宿舍に見て先般の謝禮を述へられたり今同人の顔を見るに不思儀に本癒し彼の毛髪も再び生じたり然るに其毛髪は黑色にして以前の分は赤色なり赤色の生る際に少しの黑色あるは誠に不思儀也他人是れを問ふときは同氏答へて曰く此處の分は日本より貰し毛髪なる故黑色に候と同人は小生歸國の節同道したき由申居候

四月

一雄様　　正太郎

◎一夜の靈夢は病氣全快し壯健となる

明治十五年の事なりき肥前國長崎西濱町四十一番戸に住める士族林智時と云へるは舊幕の頃は長男吏を勤め居りしも維新后は其役を解かれたれど早くも商法にかはり夫婦睦まじく家産もかなりに暮らせしにこの智時は性質篤實温厚にて萬事萬端ゆきとゝき家内は素より近所隣家へも交際よく指を屈らるゝ程の人望でありけるにいかなる故にや不斗先頃より病にかゝり其れか基となり毎日ぶらぶらにて徒に日を送りしゆゑ家内も大に心配し醫者

よ藥よと千變万化に手を盡せどもなんの効もなければ今は皆々生涯の病人と思あきらめ日を送りをるうち去る人の勧めにて同所酒屋町の黒住の教會所に參拜し禁厭を受けしかば直に御蔭を蒙り同年四月上旬神文なども奉り いよ〳〵敬神の心いやまさり怠ることなく日々丹誠を凝して撓まず祈り居りしに去る八月廿二日の夜俄に大熱燒ぜ如く燃るが如き氣焔はげしく暫時たへ入る程惱めるが十時頃厠に行かんと樣倒まで至りしに一陣の暴風颯と身に衝突り遂に至り得ず寢處に歸りしに忽ち身体凜列として水をかくるが如く寒く總身振ひ齒の根も合はず冷汗衣を濕し其の苦痛看病の人々も見るに忍びさりしか丁度四時頃になれはなんとなく眠りにつき次第に氣力も疲れぬや、あつて教會所より先生お出なさりたと云ふ一聲を聞くとをはゐしかは忽ち枕上に白髮の老翁正衣を着けしとぬやかに歩みきたりて禁厭を授けんといへる一言に苦痛を不厭やう〳〵に起居り座るを翁は雙手を延て胸より腹を撫で神言を唱へ玉い陽氣を吹きかけ玉ふに其心地よきこと恰も涼風の暑熱を吹き拂ふが如く心地にてあるまだ聞慣ぬ祓の詞をいひて額に手をあて息を吹き掛け脊より肩腰殘ることなく撫で吹き玉ふこと前の如くせらるゝ事數度なるに苦痛は隨て消ゆるが如く快なることがぎりなし終で翁の詭き玉ふに人の身躰は陰陽の二氣あり毎朝日拜の前に陰氣を吹拂ひのちに朝陽に向ひ天照太神の御名を稱へて陽氣を吸ハへしその陽氣充れば病はなし汝陰氣を以て心を痛めなよ病は逆ではないぞへ速に癒ゆるなりとぞのたまへしと聞や忽ち夢さめると翌廿三日朝陽出でんとする曙のにてあり

しにいと心地勇ましく清爽に病苦は全く消ぬ已なからも不審に思ひ省みて前夜の苦惱と夢中の云々また氣分宜なりたる事を思ひかれこれ尋常のことにわらず全く靈夢ならんと始めて心に覺り神恩肝に銘じおもはず涙を流しける直に手を洗らひ口注き天を仰き地に伏し祝をなし其のち酒屋町教會所に至り夢中のことを逐一に語り教祖の尊影を拜み始めて夢中なる老翁は宗忠の神にまします事を知り禁厭中に聞なれぬ御詞の所々幻に覺へたるは先生のいへる禁厭の詞も同じけれは彌以て敬神の心深くなり日々參詣怠らす御蔭を頂き日々樂しく送りし内去る九月の頃或る役所の庶務掛を命せられ毎日出勤し務方繁きをも厭もせず勉强し愈々身体强壯なるは平素より智時の性質篤實にて敬神の志し深きを天照覽し玉ひ一度は病氣に永く苦しみ本派にいふ善人の罪となりしも一夜の靈夢に病氣全快しかゝる健康の人となりしは「祈りなばなどか印のなからめん本より神と同じ身なれば」との玉ひし如く撓まず屈せず神を敬ふこと怠たらず絶えず常に信心を以て神に敬せしなれはこそかく難有き身とはなりける然らば信なきの心をもつて教祖を見れば在しまさず信あれば教祖の御影を拜し得るはこの智時氏を以て証とすへく亦た以て神德は決して疑ふへからず

◎大元1詣て立所に神疵を頂く

但馬國養文郡十二所村四十五番地に居住する秋山太右衛門が娘アイ（十九）は去る明治十年の頃より如何なる病毒のなす業にや不圖右の手屈みて更に伸ず其難澁いふばかりなきより其身は固より両親とも一方ならず心配し醫

藥治療おろかはなかりしも更に眼藥治療少しも効を見す遂に生れも附ぬ不具者となり其愁傷一方ならずもはや年頃なるも緣談のはなしにさへ差し支へ明暮是のみ苦にやみ居る其樣を見る両親は尙さら全き人の子を見るに付てもうらやましく詫ち暮しけるに今は人力の及ぶ所にあらざるを悟り神の加護を蒙らばやと思ひ本敎のをしへ子となり一向信仰に志ざし神德むなしからすは何とぞ不具の身を不憐と思召し全き人並の自由の身とならしめ玉へと信心怠りなかりしが今度大元上棟式祭典に付ては實に我道の花咲く春にあいたる心地にて遠路を厭はす遥々吾もく〳〵と參詣曳も聞らざるより彼のアイも參詣をなし大敎會所に詣て各先生の說敎を聽聞し信心肺肝に銘する折から仝日午后五時頃說敎小憩の間に敎職森本與惣氏に禁厭を授かりしに不測なる哉難有きかな七年以來全く不具者となり果し身が忽然其手伸び自由となるにぞコハ夢か現かと即座の御蔭に驚くばかり有難涙にくれたるに邊りに並居る信者達も一同聲をあげ感佩し暫しは嗚りもやまざりけり彼の岩屋戸の前に初めて大神の日の御光赫きたる事八百萬の神あなたのしゝふと喜び玉いしもさることにて此アイも此神德に數個年の難病立所に去りあなたのしあら嬉しやと喜びたりけん

◎活物を呼出さを不測の靈驗を蒙る

備中國淺口郡片島村の內字鐵砲と云ふ處に染工の家業を營む田中重四郎同息男彌三郎は親子とも最も手厚き信者にて敬神篤志類なかりしが此重四郎が四女モサ(廿五)は先年より同國都宇郡上道村板屋與三郎に嫁したるが夫

婦が中に出生したる長女キセ（三才）を引連れ昨年二月五日の事なりし父母の安否を訪ばやと久振親里に來り滯留なしける内同十日の午前十時頃なりし彼のキセが遊りに見えざる故こは如何せしと東西にかけ歩行き尋ねもとめれど更に行方知れざるに此所は本村と阻たりて東西北の三方とも川にて引廻れど川の中こそ氣遣はしけれと東方の川を尋ねしに川中の杭に何かは知らず黑き物の見ゆるに驚き小船に打乘り漕行き見れどあな愴ましや不便やな彼キセは水に落入此杭に流れかゝりたるを引上見れば既に二ヶ時も經たらんやと思はる息も切れ脈も上りたる有樣一家の驚き大方ならざる中よも母ヒサは氣も狂亂せんばかりを押しづめ漸く家に抱きゆき醫者よ藥と騒動せしも今はせんかた盡き泣ばかりヒサは我身の油斷よりかゝる事となり

何をすぞ〳〵唯一人立歸り夫與三郎にいふわけせんと物狂はしき体なるを兄彌三郎は押宥め歎きてもせんなき事かゝる時こそ我日頃ねぎ奉る神力は如何ならんと神前に撒水をふり祓ひ清め一間をしめ切り一心不亂に神言を奏し唯神德にまかせつゝ身も我も一切離れ死のなき誠一ツを以て天地に乞ふのみ活物を呼出し丹誠をこらしけるにあな不測なる哉難有きかな次の間なるキセが死骸忽にうごき出でかすかなる聲を發せしにぞ一同躍りわかり手を打て難有やくすしき御靈驗かな御蔭かなと手の舞足の踏所を知らざりしは實理りとぞ覺へけるさてしも次第にキセは氣もたしかになり種々介抱せしに五日程經て全く平常に復しけるにぞヒサは子を獨り拾ひ得たる心地にて五日振に目出度親子手に手を引つゝ上道村へ歸りしは今にはしめぬ不

から神德の厚なき豈誰か敬ひ奉らざらんやさるにても活物をいたゞき死人を活かす天地の感應神力の奇妙また例めし少きことにこそ

◎靈夢により御蔭を蒙る

備前國上道郡沖新田外七番に淺右衛門といへる手厚き信者ありけるが或時熱症にて床に付きけるとき家内は素より親類のものより藥用などすゝめけれども曾て聞き入れず一心に神の加護に身を任すべしといふに付其儘にて置きけるに迫々おもりて既に正氣もたゞ〳〵になりけること數日なり皆々打集ひ大に心痛いたしける時に病人フト起上りさて〳〵ありがたきことなりと云につき集ひし人々樣子を尋ねけれど只今敎祖樣にやありけん目のあたり四五尺はなれて顯はれたまひ仰せられけるにその方かね〳〵道の極意なる處をこゝろざして居るが道の極意は決して知りたく思ふなよ大なる道ゆゑに敎へやうと云ふて敎へらるゝ者にもなし習はおと思ふても習はるゝ者にもなしたとへ今時の先生と呼るゝ高弟たりとも道の極意を知りたるものは一人もなしたゞ御道の儀は何にも覺えているに及べす何事も天に預けて置く心になる時は何時にても入用の時に用に立つものなり其方の心もとより活通しなりその活通しのこゝろじやによりて形も共に生通しにせよ然し形をすつる氣にならねば病氣はゆるまゝぞよとの仰せありたりと物語れば一同感涙に咽びけり夫より御蔭を蒙りて即ち大病平癒したり平癒の後時尾氏の宅へ淺右衛門參りて物語るを再々尋ねて時尾氏聞き玉ふまゝしるされたり

◎説教の功驗よて難船を遁れし神庇を蒙る

伯耆國東伯郡元久米郡福米村大字上米積

少講議尾崎長次郎

右は先年大元へ參りし時出雲國の産にて加賀國の教會所へ在勤せる大講義玉儀禮造氏の説教を聞きしに明治十七年の秋加賀國三崎沖にて大風波起り船既に危く成りし時教祖神の波風をいかで鎮めんと云ふ御歌を半分覺へて居て一心に唱へ大御神教祖神を奉祈けるに不思議よ出羽國庄内港へ入船して助りし趣抔委しき物語りの説教中に現れたれば心中大に御蔭を受け如此靈驗顯るゝもの成れは此後海上にていかなる難風に遇ふとも神の御助けを賜らるゝに相違なしと確信し難有思ひて歸國し其後北海道へ用件ありて行

かんと思ふ折から明治十八年五月三十日因幡國網代田より北海道行の和船青龍丸と云ふ四百石積の船に乘り船頭水夫共九人乘客は鳥取の人にて百廿二人便船を得て乘込み出帆せり順風にて飛が如く走せ行くに翌卅一日朝は風勢益々募り晝頃は大風に成り午後三時頃には暴風と成り夜に入彌々烈敷玄燈を打碎き船中の客は吐くやら叫ふやら死人の如くに成り浪來れは客は側らに轉び集ると云ふ有樣にて最早船は覆らんとす故乘客の上に苧綱を引き是に取付かせ居りしも追々身体弱り手も不可樣に成り無余儀婦人子供等弱りたる人々は「ガッパ」の下に入れ込み身体不動樣に致し夜十二時頃船頭乘客に向ひ最早致し方なく甚た氣の毒なれ共皆樣御覺悟成されと云ふ乘客は大に驚き何ぞ助る道は無きや船中の事は船頭に任せ居る事ゆへ

覺悟すと雖とも我に如何とも致方なく云々と申せは船頭申には此上は柱を切り帆を波の來る方に提れは一時は助るべきも此船造りてより廿六年に成る古船にて柱を切るとも船体難保と云ふ其問答中に大波船の中央に打込み船梁一本はづれて其音響きたる時は何れも死た心地にて大聲を發し泣き叫ぶ實にすさまじき事言語に盡し難く其時因州の安藤甚吉と云へる人申出るには伯州の尾崎長次郎さんは朝夕御稜を上げ神樣を拜せらるゝ故かゝる時に助かる道は無きや助る道有らは何卒お助け被下と云ふ長次郎の云へるには隨分助かる道はあれども乘客思ひ〳〵念佛を唱へるもありお題目を唱へるもあり金刀比羅樣とか何とか各々思ひ〳〵にて皆狼狽し更ら一心を振起すと申譯に至らず人心一決して心を鎭め不申ては神明の御加護も有る間敗私一人は暫へ船が碎けても助るべしと申せは甚吉然らば信心の方針を知らせ給へと云ふ長次郎は本敎の大意鎭魂を旨とし神明に打ち任せ敎祖神の波鎭めの御歌を一同か信して朗讀せは助るべしと云ふ依て甚吉は衆人に向ひ其旨を說明すれは一同承諾致し長次郎に依賴せり長次郎も一心を起し祈念せんと手水を使はんとすれとも水なく無已天津祝詞を唱へ夫より神言五回を讀み上けて敎祖神を遙拜し此度御助けを蒙りなは三度の食事も二度に致しても冬分袷一枚着ても御道の爲めには盡し可申く一心不亂に祈願し夫より衆人と共に波風をいかて鎭めんの歌を敎へ十度位唱へる內同音に歌を朗讀する樣に成りたる時船頭乘客の所へ來りて皆樣今天淸れて星か見へ波も鎭まりかけましたから最早大丈夫でござる尙御信心を願ひ升私共も共

に神樣を祈り海風の御歌を唱奔と申し時の嬉しさいわん方なかりしとぞ大波打込み船梁の落し時には金錢も田畑も家財も何も入らぬどうぞ助かり度と思ひいかなる財寶を海へ投じた所でかゝる場合に波も鎭り間敷命さへ有れば何もかも入らぬと一同が青く成り赤くなり只助命を乞ふのみなりし翌六月一日に成りたれど海も泙となれりされども何方へ船を向て國がある事やら更に分らず其中に流れ來たる加州の印ある千三百石積位の新艘碎たるを見て船頭を始め一同のもの一層神明の御助けに成りし事も分りかゝる新らしき大船碎けて居るに此古船の碎け或は沈まざるは全く神助なりと一同神明に御禮拜を致し教祖の御德に感し嬉し涙にくれたり夫より日々船を流し居る内十三日に至りて帆前船一艘に出合ひ爰は何國なるやと問へは飛島

沖なりと答ふ夫より順に帆を揚げ風に任せて行く内雲か山か遙に見へ出し渡嶋國大嶋に着し後志の國奥尻郡鶴掛村に上り水を求め六月十六日に小樽に着し乘客并に荷物を揚たれは其儘船は碎けて沈みける全く神樣が人の上る迄船を抱き給ひしならんと船頭始め乘客一同神德の尊きに感せさるもはなかりしとぞ

因曰斯道は信心が眼目なり信心から人智を以て圖り知られぬ神庇を蒙り夫より道の溫奥を悟るに至るものなれば靈驗はど尊さものはあらす然るに黒住教の說教は靈驗の咄し多くして道味を知るに迂遠なりと云ふ人もあれとも長次郎も前年大元にて波風の鎭りし靈驗の說教を聽聞して居りし故本文の如き難を遁れたるのみならす衆人に神德の尊き

ことを知らしめたるに至れり夫れ故理屈を離れて常に信心を第一とし靈驗の尊き事を知り身も心も堅固にして君の爲め國の爲め精忠を盡し家に在りては家業を大切に勸めて富國强兵の基を立つるは信心が本たる事を知るべし

◎一心を凝して繼母の病氣を救ふ

岡山縣備前國和氣郡衣笠村四百三拾二番地居住溝邊義三郎と云へるは兼て本教の信者なるか仝人後妻ユミ(五十九)は明治十五年一月四日ふと風の心地にて病ミ臥して初めは平常のことゝをもいきや日々病の重るゆゑ醫者を迎へて藥の手當など怠りなく用ゆれども益々重体となりしが同月十四日に至りては甚だ危篤に迫り遂に息絶えて蘇生る景色もなく涙ふりそゝぐとも

せんかたなくも親類の人々枕邊にうちより歎き悲めども更に致方なきにユミは兼て心がけの善良なるものにて女の道をよく心得決して後妻の奸曲をはかることなく先妻の遺子恒吉とて緣付の初めより我兒の如く撫育せしかは近隣の者其慈愛を感賞して人々も彼ユミを範師と頼む許りなりしにはかなくも此世を去るとはいかなる事よと氣の毒に思ひ袖を濡さぬはなかりし恒吉思ふに已れ義理ある母にして殊に襁褓の内より今日まで愛せられ這へは立て立ては歩めと養はれしに其恩を報する時も無くしてかく死別れては不幸の罪重からんと一向に思ひ詰め此上は大御神敬祖神に願上くるの外あらしと井の傍に行き悶絶せし母の再生を祈らんと肌裂く斗りの寒水を汲上け濯水して東に向ひ一念無二に至誠を以て全快を祈らんと其夜の眞夜中迄

佇立祈念を凝らせしに在天の神明感納坐々しか病床にある母の一聲あつと在に驚き直ちに母の病床に至り脊撫て足撫て喜しかは母の云ふには今夢に大河の岸に至りしに水上よりいとも美麗の舟に僧侶あまた乗込み妾を迎へに來て手を取りていさ乗り玉へと云ふに背の方より最も尊き御老人が妾の袂を取り玉ひてその舟に乗ることはならぬと宣ふゆゑに振りかへり見れは白き御衣に玉をかけ手には榊枝を持玉ひてあるを伏し拜み其教へよ從ひて此方に來るかと見れは夢は醒はてぬ是れ全く神様の助け玉ふならんとあなうれしと病床ながら伏し拜みしに恒吉の孝心自から貫徹して神明の救助を受け得て不日して全快したりと誠よ神明の靈威恐べき事にこそ有けれ

◎一心の誠よて小兒の火傷平癒す

備前國和氣郡北山方村に居住する藤島里松と云ふ者の長女にイトノと云へるあり去る十四年十一月廿一日生れにて追々生長し這たり立たり戯れ蟻日に學ひ月に覺へ其愛らしきのみならす特に初娘の事なれは蝶よ花よと右左より抱き或は負ひ其嬉さの親心知らす〳〵と早や翌年十一月廿一日も來りけれど父母は今日こそ娘が誕生日なればとて朝夙く起きて赤飯を炊ぎんため釜の下へ火を焚き付て坐敷を拂い神床を清め居たりしがイトノは稚兒の僻とて朝早く母親に連れ起られしに喜ひ戯れ遊び簷の前に寒さを凌き鼻嚏氣高く眠り居る畜猫を相手にせんと其を目かけて戯れつゝある折しも隣の藤島孫次の妻が來かゝりアレ—危ないと謂ふ間もなくイトノは猫に乗かゝり猫はイトノに壓へられ其を免れんと身をかはす機會よイトノは燃え出る

火中に陷いりしよこれはと驚き抱き起せば悶いやイトノは滿面燒けふくれ目口鼻も分らぬ程よなりしかは家内のものは云ふまでもなく近所隣家のものもいぶもは周章狼狽如何はせんと評議區々なる中に或人が之は先づ叔父御へ申し遣し神よ祈るべしといふに一同之れに一決し直に同村神官豐福方廣へ斯と樣子を告しかば幸ひ同氏在宿にて諸の神に誓い祈請をなしていふ樣この兒の壽命保ち難しとの事なるよ一同は眉を顰め額をかゝへ復び評議の其中よ此は大變の事なれど黑住樣に念願し御道の御禁厭を受なば如何との事に付き本敎信徒井上春太郎氏へ右の次第を述べ兒の生命救ひ賜と懇々依賴なせし故同氏は藤島の宅へ到り神前にて祈念をなし且つ御禁厭を施せしがイトノは火傷に苦しみ泣聲漸く打止めてすや〳〵眠を催せしかば一同も爰に一先安堵の思ひをなしたりさ尙黑住敎信徒の一同講席を催し井上氏へ依賴し祈念を請ふ其砌同氏の說敎に難あり有難しとは敎祖の御敎にて難を難と思はぬか第一ぞ皆々心を活す時は活らるゝは疑いなし心が元ぞ其心から活さへすれば神德の御蔭はあらはるゝぞや人は身も心も素よりなき者が神の御德で生れ來る程の德が備はりてある者なれば火傷位は大御神樣の御蔭によつて治ること疑なし故に心を活して御蔭を受らるべしと說かれしかば家内の者は無論信者に至るまで難有く聽聞し居る處へ近所の醫師青山主僊と云ふ人が參りてイトノが傷を診察され斯まで大傷なるに熱氣の起らぬは實に信心の御蔭なるべしと申し藥も只二服置て直に去られたり其後度々禁厭を乞しが追々癒へ昨日は乳を吸ひ今日は早や御飯を食べる程よなり萬

事尋常のもの、如くなりたりしかば尚更に彌増さる難有さ大御神様の御道のおかげと家内一同且驚き且喜びに堪へやらず直に本教へ神交を奉呈し又更に御禮席を開き井上氏を招待し深く神徳の有難きを謝せしと其節よは以前の火傷の全く癒へたるのみか痕さへ見ざりければ天照す御神や教祖の御徳の有難きかぎりなしと誰一人として感動せざる者なかりしと云ふ

◎孝子の誠天よ通し高大なる神徳を戴く

河内國大竹村阪上秀次郎（二十六年）は左まで敬神家でなかりしが母のお何は明治初年の頃眼病の上に癲癇と云ふ難症よ罹り秀次郎は之を歎き醫者や藥は謂までもなく祈禱や灸に至るまで百方力を盡せども只の一ッの驗しもなく病氣は益々増長して両眼遂に明りを失ひ又癲癇は屢々起り悶へ苦しむ其様

母親よりも傍で見て居る秀次郎が心の中如何ばかりなりしかは治らんものか金で治るものなれば假令如何程いるとでもそれに厭ひはなけれども金で治る道もなし左りとて母の彼の強病何卒直して進せたきものと明暮心を碎きしか誠の神よ通じてや或日人の語しに黒住教の禁厭にて不治の強病難病も直りし人の世に多くあるとの事を聞きしより平常信心なき秀次郎も母の病よ術盡て如何せんと當惑の折柄なれば耳寄な話を聞しと歡んで或日母をば伴なひて某教會所に到り右の由を語り禁厭を懇請したれば在勤教師早速に背が い神言を唱へ禁厭を施こし尚信心怠るなかれ病は道の入口に直ると教祖も教へ給ひしぞと最も懇なる御話を聞き其日は歸宅したりしか其後猶他念なく秀次郎母諸共只有難く信心手厚くなしたりしが實にも教祖の御歌の通り

「誠から祈らば神もあらたなり神の心で神を祈らば」と秀次郎は孝心の誠を以て神を祈りしより忽ち神の感應ありて十四五年の久しき病よ臥したるも の春日よ雪の解て行く如く日を追ふて全たく癒たれば秀次郎の歡こび一方ならず是は有難き神の德かゝる尊き御道ある事を知らずして徒らに十四五年の其間た母に苦痛をさせたるも皆我信心のなき故と神の御德を知らざりし前非を悔て益信心の道を勸めて居たるうち兼て明りを失ひし両眼共に薄紙を剝が如くに開きしより秀次郎は猶々有難思ひ專ら敬神に志厚かりし或時近傍よ某梵閣の法會ありて老若男女群集一方ならざりしが秀次郎は之を觀て備管考ふに我曾て聞く佛は夷狄の一法耳と彼れすら斯る隆盛を極ひるにまして我國固有の神道未だ擴張力に乏しく然るを恬として顧みざるが如くあるは神州神民の恥辱なりと大に奮發をなして我邸内長尾門の明所あるを幸ひ爰に假りに黒住教の說教所を開設し我神道を擴張せんと會日を定め近村の人を集め敬神尊王の道を說話抔して居りしが或日思ふに我居宅すら幾千圓の金を擲ちて經營せしに掛卷母畏き　天照太御神を納屋同斷の門長屋に祭り奉つるこそ不敬なりと遂に秀次郎一手にて新たに說教所を設け愈々信心を盡し「我も生き人をも生して天地の誠の中に遊ぶ嬉しさ」との教歌の意を心として勤めしより茲に參集して御蔭を蒙る人數ふるに遑なき程盛大よ赴きしとぞ

◎常の信心の功蹟よ據り難船を助かる

福岡縣下筑前國遠賀郡有毛村の岩屋浦と唱ふる浦は戸數三十七八軒にして

百七十二

大半漁を業とする其が中に新田清右衛門となん呼べるものあり仝氏は兼て黒住教に神文を奉じたる神心特志家なるが去る明治十三年七月中旬頃新に漁船を造りこれにて大に魚を獲んものと其の年十一月四人乗込て白島と脇田浦との沖合にて暫し網引きなどなし居るに豈に圖らん一天俄にかけ曇り恰も墨を流したるが如く北風烈しく白雪を捲き見る〳〵内に四方を辨ずる能はず只に白玉中にあるものならす波濤はさながら山の如くアレ〳〵と云ふ間もなく櫓は挫け揖は折れ舟は早や岩礁にふれ微塵となりしより漸く舟板にさはり波間に漂され今にもあれ身は海藻とならんと思へども茲は名に負ふ鳥も通はぬ玄海洋なれど只に天を祈る折りから數艘の大船航海するを見附け聲を枯らして救を乞ひし問もなく彼の大船は波間に沈みし跡より

來る舟に尙ほ一層聲を張上げ乞ひしに已れの危より誰れ一人として聲だに應せざれは斯は何とせん身体已に疲れ只に死を待つより外はなしと互に顏を見合せて涙を流し物をも得云はざるは道理なれ嗚呼天の惠や今一艘の大舟程近く見ゆるより尙も手を合せ救助を乞ふ聲に舟子どもはアレ見よあの通り憫然な事とは云ふもの〻此船とても今にあの通りなるかも知れぬに彼の人々等を救けてはこの舟が案じられると云ひ立て已にうちすぎんとせしより船頭は舟子に向ひ申す樣吾れ先年佐渡の海を乘り居る時計らず大風雨にて舟も破れ今や一命危き所を或る舟に助けられ此の六十路の坂も越す老體となりその時の嬉しさ譬へて云ふ樣もなく地獄で佛に遇たとはこの事かと今の今まで思ひ出し嬉し涙をこぼしては朝夕手を合し其恩を謝して居る